

こ だ ま だ い て ん ぼ く い せ き
児玉大天白遺跡

— 工場建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2010

本 庄 市 遺 跡 調 査 会

序

本庄市児玉町の地は、古くは武蔵武士「児玉党」児玉氏の発祥の地とされ、鎌倉街道^{かみつみち}上道の宿や市の栄えた要衝の地として知られております。また、本遺跡の位置する大天白^{だいてんぱく}の地は、中世の古道と考えられる「大道」^{おおみち}に沿っており、児玉市街と小山川に挟まれた児玉地区の中央に位置しております。ここに報告する児玉大天白遺跡は、これらを遥かに遡る縄文時代の遺跡であり、「思池」^{おもいけ}という湧水池の近傍に営まれた集落の跡であります。かつて先人たちの生活を支えていたこの湧水は、現在「思池親水公園」として整備されておりますが、本遺跡の周辺は、国道 254 バイパスと児玉市街地に接しておりますところから近年では開発が進み、古い歴史的な景観が失われつつあります。

このたび、この児玉大天白遺跡で発掘調査された縄文時代に営まれた集落跡については、記録として保存し、この発掘調査報告書という形で永く後世に伝えることになりました。これらの埋蔵文化財は、将来の私たちの文化的な生活を形づくるためのひとつの基礎となりえるものであり、これらを守り伝えて行くことはもとより、地域の理解のために生かし、私たちのよって立つ基盤を再確認するためのひとつの資料として活用して行くことが、今後の文化財保護の課題であるといっておよいでしょう。

ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、神原土地建物株式会社をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。このささやかな調査報告書は、埋蔵文化財の保護・活用にとっての第一歩であるに過ぎませんが、この地域の住民皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成 22 年 10 月

本庄市遺跡調査会
会長 茂 木 孝 彦

例 言

1. 本書は埼玉県本庄市児玉町児玉 1724 番地 8 号に所在する児玉大天白遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は工場建設に伴う事前の記録保存を目的として本庄市遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査および整理・報告に要した経費は、神原土地建物株式会社の委託金である。
4. 発掘調査は、本庄市児玉大天白遺跡のうち、690 m²を対象として実施した。
5. 発掘調査期間は以下のとおりである。
自 平成 6 年 11 月 22 日
至 平成 7 年 2 月 28 日
6. 発掘調査は、鈴木徳雄、尾内俊彦が担当した。現地調査は、尾内が専従し、大熊季広が補佐した。
7. 整理調査期間は以下のとおりである。
自 平成 21 年 5 月 7 日
至 平成 22 年 6 月 30 日
8. 整理および報告書刊行にかかる業務は、有限会社毛野考古学研究所に委託し、整理および報告書刊行にかかる業務は浅間陽（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
9. 本書の執筆は、Ⅰを本庄市教育委員会文化財保護課、Ⅱを鈴木徳雄が、Ⅲ～Ⅴを浅間陽が担当した。また、縄紋土器を高橋清文（有限会社毛野考古学研究所）、石器及び石製品を土井道昭（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。
10. 本書の編集は、本庄市教育委員会文化財保護課の指導に基づき、浅間陽が担当した。
11. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関連する資料は本庄市教育委員会において保管している。
12. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方から貴重な御助言、御指導、御協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます。（順不動・敬称略）
金子彰男、田村 誠、外尾常人、中沢良一、長滝歳康、丸山 修、矢内 勲、山口逸弘、
東海大学考古学研究会、埼玉県生涯学習文化財課

凡 例

1. 各遺構図における方位針は座標北をさす。
2. 本調査における遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真中の遺構名称も同一の記号を用いた。
SI…竪穴住居跡 SK…土坑 P…ピット
3. 本書に掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、異なる縮尺を用いた場合は図中に同じ縮尺のスケールを付してある。

【遺構図】 遺構全測図… 1/200、個別遺構図… 1/60 【遺物実測図】 1/3

4. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
5. 遺構図・遺物実測図中のスクリーントーンが示す内容は以下のとおりである。
 - a. 遺構断面図中の斜線は基本層序V層を示す。
 - b. 遺構図に使用したその他のスクリーントーンは図中に凡例を示した。
6. 遺物分布図の●は土器、▲は石器、■は礫を表す。また、[]は断面図に反映される範囲を表す。
7. 本書中に使用したAs-Aとは、1783（天明3）年に降下した浅間山噴出A軽石である。
8. 遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）に基づいて記載している。
9. 遺構の規模は上端での計測値を原則としている。
10. 土坑の長軸方位については、上端の中心線を軸線として計測した。
11. 遺物観察表中の[]内の数値は推定値、()内の数値は残存値を示す。
12. 本書掲載の地形図は、国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」、位置図は児玉町都市計画図1/2,500「No.15」に加筆したものをを用いた。

児玉大天白遺跡発掘調査組織

児玉町遺跡調査会（平成6年度：抜粋）

会 長	富丘文雄	児玉町教育委員会教育長	清水 満	児玉町教育委員会社会教育課
理 事	田島三郎	児玉町文化財保護審議委員長		社会教育係長
	清水守雄	児玉町文化財保護審議委員	田島賢二	社会教育係
	武内和雄	児玉町文化財保護審議委員	倉林美恵子	社会教育係
	野口敏雄	児玉町文化財保護審議委員	恋河内昭彦	社会教育係
	小島和子	児玉町文化財保護審議委員	徳山寿樹	社会教育係
	大塚 勲	児玉町教育委員会社会教育課長	調査員 鈴木徳雄	社会教育係
幹 事	関根安男	児玉町教育委員会社会教育課	尾内俊彦	児玉町遺跡調査会調査員
		課長補佐		

児玉大天白遺跡整理・報告組織

本庄市遺跡調査会（平成22年度）

会 長	茂木孝彦	本庄市教育委員会教育長	太田博之	本庄市教育委員会文化財保護課
理 事	清水守雄	本庄市文化財保護審議委員		埋蔵文化財係長
	腰塚 修	本庄市教育委員会事務局長	恋河内昭彦	埋蔵文化財係主査
	(会長代理)		大熊季広	埋蔵文化財係主査
監 事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長	松本 完	埋蔵文化財係主任
	田島弘行	本庄市会計課長	松澤浩一	埋蔵文化財係主任
幹 事	金井孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長	的野善行	埋蔵文化財係臨時職員
	(事務局長)			
	鈴木徳雄	本庄市教育委員会文化財保護課		
		副参事兼課長補佐		

目次

序
例言
凡例
目次

挿図目次
挿表目次
写真目次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の環境	1
1	地理的環境	1
2	歴史的環境	3
III	調査の方法と経過	7
1	調査の方法	7
2	調査の経過	7
IV	検出された遺構と遺物	8
1	遺跡の概要	8
2	基本層序	8
3	検出された遺構と遺物	10
(1)	竪穴住居跡	10
(2)	土坑	18
(3)	ピット	21
(4)	遺物包含層	21
V	まとめ	26

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

図 1	埼玉県の地形	2	図 11	SI - 03 出土遺物	14
図 2	児玉大天白遺跡の位置と周辺の遺跡	4	図 12	SI - 04	15
図 3	調査地点	7	図 13	SI - 04 出土遺物	16
図 4	基本層序	8	図 14	SI - 05	17
図 5	調査区全体図	9	図 15	SK - 01・02	18
図 6	SI - 01	10	図 16	SK - 03 ~ 10・13・14	19
図 7	SI - 02	11	図 17	SK - 11・12・15 ~ 20	20
図 8	SI - 02 出土遺物 (1)	11	図 18	P - 01 ~ 03	21
図 9	SI - 02 出土遺物 (2)	12	図 19	遺物包含層・遺構外出土遺物 (1)	22
図 10	SI - 03	13	図 20	遺物包含層・遺構外出土遺物 (2)	23
			図 21	縄紋時代中期の主要遺跡	27

挿 表 目 次

表 1	SI-02出土遺物観察表	12	表 8	遺物包含層出土石器組成表(点数)	24
表 2	SI-03出土遺物観察表	14	表 9	遺物包含層出土石器組成表(重量)	24
表 3	SI-04出土遺物観察表(1)	16	表10	遺物包含層・遺構外出土遺物観察表(1)	24
表 4	SI-04出土遺物観察表(2)	17			
表 5	土坑計測表	18	表11	遺物包含層・遺構外出土遺物観察表(2)	24
表 6	ピット計測表	21			
表 7	遺物包含層出土石器組成表	24			

写真図版目次

写真図版 1	SI - 02 出土遺物
	SI - 03 出土遺物
	SI - 04 出土遺物 (1)
写真図版 2	SI - 04 出土遺物 (2)
	遺物包含層・遺構外出土遺物 (1)
写真図版 3	遺物包含層・遺構外出土遺物 (2)

I 調査に至る経過

平成6年9月22日、児玉郡児玉町大字児玉字大天白1724番地－8（現本庄市児玉町児玉字大天白1724番地－8）の開発工事を計画している神原土地建物株式会社より、同開発予定地内の埋蔵文化財の所在とその取り扱いについて、児玉町教育委員会（当時）に照会があった。

児玉町教育委員会では、照会のあった開発予定地が、十分に埋蔵文化財の詳細な分布が把握されておらず、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が認められるところから、現状を変更しようとする場合は、町教育委員会と協議するとともに埋蔵文化財の包蔵状況を確認するための試掘調査を実施し、文化財保護法の規定に則って事業を実施する旨を回答した。同年9月26日に神原土地建物株式会社より試掘調査の依頼があり、同年10月5日に試掘調査を実施したところ、縄紋時代中期の遺跡であることが確認されたため、周知の埋蔵文化財包蔵地No.54－307遺跡（児玉大天白遺跡）とした。照会のあった区域が、埋蔵文化財包蔵地であることが確認されたところから、開発予定地は「埋蔵文化財の所在が確認されたところから現状で保存することが望ましい。やむを得ず現状変更工事を実施する場合は、事前に町教育委員会とその保存措置について協議し、文化財保護法第57条の2の規定により埋蔵文化財発掘届を提出すること」として回答した。

その後、神原土地建物株式会社と児玉町教育委員会との間で開発予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、日本ビニールコード株式会社の工場建設予定のため現状で保存することが極めて困難であることから、やむを得ず発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査に関わる届出は、同年児玉町遺跡調査会会長富丘文雄より、「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が、同じく神原土地建物株式会社代表取締役神原照夫より「埋蔵文化財発掘の届出について」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て、文化庁長官に提出されている。尚、埼玉県教育委員会からは、教文第2－156号によって発掘調査の指示通知があった。

発掘調査の実施にあたっては、児玉町教育委員会の指導に基づいて神原土地建物株式会社と児玉町遺跡調査会との間で、平成6年11月18日に発掘調査に関する委託契約を締結し、平成6年11月22日から平成7年2月28日まで現地での発掘調査が実施された。（本庄市教育委員会文化財保護課）

II 遺跡の環境

1 地理的環境

児玉大天白遺跡の所在する本庄市は、平成18年1月10日に旧本庄市と旧児玉町が合併し、人口約83,000人の埼玉県北部の中心的な都市となった。新「本庄市」の市域は、東西約17.2km、南北約17.3km、面積89.71 k㎡に及び、東は深谷市および児玉郡美里町、西は児玉郡神川町、南は秩父郡皆野町および長瀨町、北西は児玉郡上里町、また北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接する、埼玉県の北西部に位置している。

本庄市には、市域の北東部に位置する本庄市街にJR高崎線本庄駅が、南西部に位置する児玉市街にはJR八高線児玉駅がある。また、市の北東部には上越新幹線本庄早稲田駅があり、現在駅前の区画整理事業が実施されている。本庄市街の北側には国道17号線が、児玉市街には国道254号線が通り、

伊勢崎市から本庄市街を経て児玉市街方向に国道 462 号線が延びている。また、市域の中央北東寄りには関越自動車道本庄・児玉インターチェンジがある。

本庄市の地形は、市域の南東側に八王子－高崎構造線上の断層崖を境に三波川系結晶片岩帯に相当する基盤層をもつ上武山地が位置している。この上部山地の南東部を構成する本庄市域においては、陣見山や不動山をはじめとする 500 m 級の山々が連なり、分水嶺を境に南側の荒川水系に属する長瀨町に接している。また、上武山地に接して第三紀層を基盤にもつ児玉丘陵が平野部に半島状に突出しており、山地付近から流下する小河川の浸食によって幾つもの小支丘に分割されている。児玉丘陵の延長上には、やはり第三紀の丘陵である生野山・浅見山なまのやま あざみやまと呼ばれる各残丘が点列状に存在している。

本庄市域の北西側には、関東平野西端を構成する神流川扇状地が展開し、扇端部に位置する深谷断層を境に烏川低地が展開しており、近世以降ではこの低地帯に利根川が流下している。神流川扇状地は、本庄台地とも呼称される低位の台地面を構成するが、この扇状地扇中央部には本庄市児玉町宮内地内に水源を発する、かつて「赤根川」と呼ばれた「女堀川」と、神川町大字二宮所在の延喜式内社である金鑽神社付近に水源を発する金鑽川が合流し、これらにより開析された沖積地が形成されている。

児玉丘陵の南側には、上武山地内の秩父郡皆野町金沢付近に水源を発する小山川みなれがわ（旧身馴川）が流れている。この小山川は、山地域の幾つもの沢水を集めて流下しているが、児玉市街の南側付近では伏流しており、美里町十条付近で表流量を増しながら本庄市五十子付近で女堀川と合流し、また深谷市域で志戸川と合流し利根川へと注いでいる。この小山川は、その流域の大半が三波川系の結晶片岩帯を流下しているところから、河床礫のほとんどは結晶片岩の礫によって構成されており、石器石材の多くはこの河床で採取することは難しい。

児玉大天白遺跡は、この小山川左岸の台地上に位置し、第三紀の残丘である生野山丘陵を北側にひかえた占地である。本遺跡の付近には「思池」おもいけ、「大池」、「清水池」と呼ばれる湧水を貯水した溜池が存在しており、遺跡はこのうち「思池」湧水の谷頭の東側に占地している。なお、この湧水に源を発

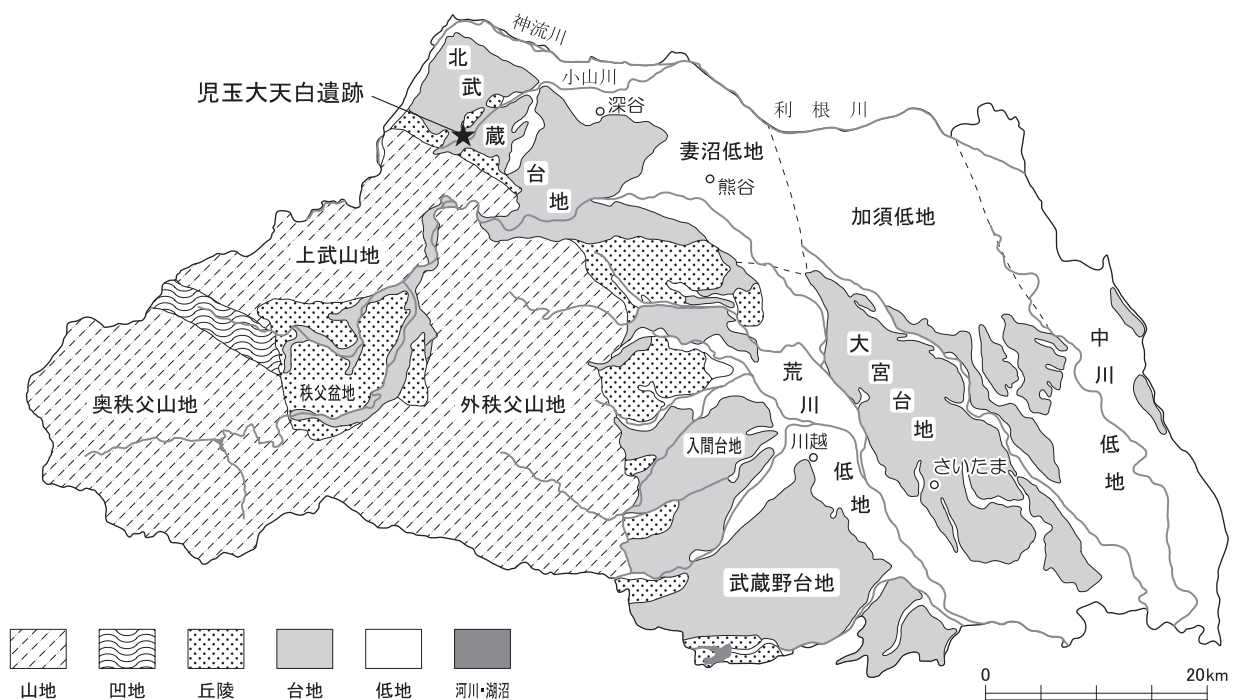


図 1 埼玉県の地形

する細流は、生野山丘陵の南側に沿って小さな開析谷を形成しつつ流下し、利根川水系の小山川（旧身馴川）へと合流している。

本報告にかかる児玉大天白遺跡は、これらの湧水によって開析された小支谷の谷頭付近に位置し、古くから「思池遺跡」として知られている児玉清水遺跡の南東側に展開しているが、遺構確認面までの被覆層が厚く、遺跡の範囲には不明な点が多い。なお、本遺跡は、国道 254 号線バイパスと県道熊谷児玉線の交差点の西側約 80 m に位置し、本庄市児玉市街の東端の J R 八高線児玉駅の東側 約 900 m に位置しており、近年急速に郊外型店舗の建設をはじめとする開発が進行した区域に相当している。

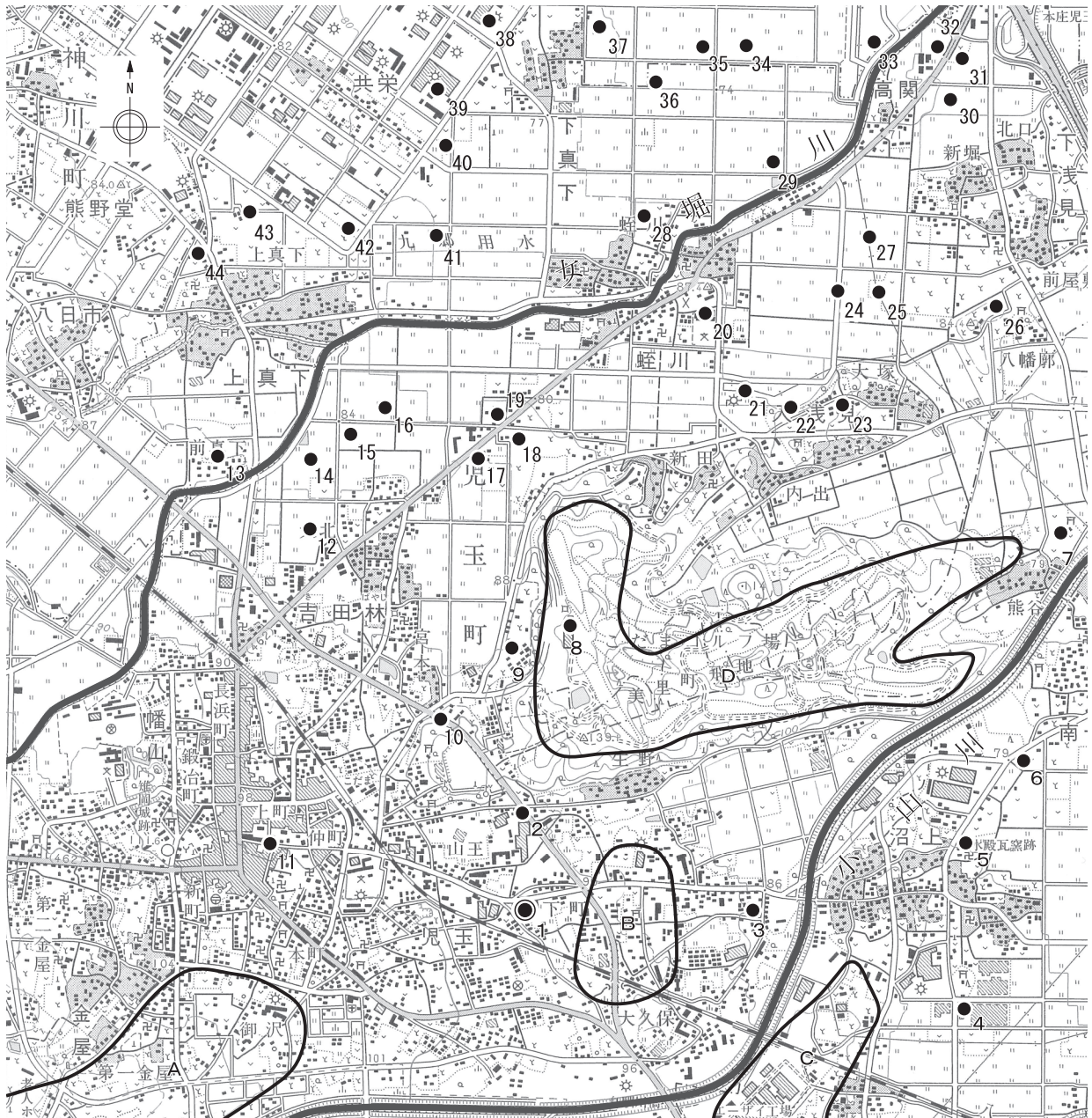
2 歴史的環境

児玉大天白遺跡では、縄紋中期の集落跡の一部が検出されているところから、ここでは本庄市域における縄紋時代の遺跡および、本遺跡の周辺に相当する「児玉」の区域を中心に歴史的な環境について概観しておきたい。

縄紋時代草創期では、長沖梅原遺跡において小範囲に爪形紋や縄の側面圧痕紋をもつ土器等の遺物が集中して検出されている。浅見山丘陵の東側先端部には宥勝寺北裏遺跡（中東 1993 他）があり、爪形紋や縄紋の側面圧痕紋あるいは撚糸紋をもつ土器群等が小範囲に集中的に出土していることが知られている。また、浅見山 I 遺跡（松本 2009）や宮内上ノ原遺跡（松澤 2005）においては、撚糸系土器や押型紋系土器、貝殻沈線紋系土器あるいは貝殻条痕紋系土器等の各土器群がそれぞれ少数検出されている。なお、山地域においても小規模な遺跡が点々と検出されている。これらは、それぞれ小規模な遺跡であるが、おそらくは、この遺物集中地点は何らかの生活の痕跡として、居住を伴う生活地点ないしは比較的長期間におよぶ露营地として反復的に利用されたものと捉えることができるであろう。

縄紋前期では、丘陵部を中心に住居跡を伴う遺跡が急増する傾向が顕著である。宮内上ノ原遺跡では前期初頭から終末期に至る各型式の土器群をはじめとする遺物や竪穴住居跡をはじめとする遺構が検出されている（松澤 2005・宮田 2008）。また、塩谷下大塚遺跡（恋河内 1990）では有尾式期の、天田遺跡（恋河内 2000）や脊戸谷遺跡（鈴木他 2005）においても諸磯式期の住居跡がそれぞれ検出され、浅見山丘陵においても大久保山遺跡ⅢC区（昆 2001）で諸磯式後半期の集落が確認されている。このように児玉丘陵周辺には、竪穴住居跡を伴う縄紋前期の遺跡が比較的稠密に分布しており、竪穴住居跡を伴わず小規模な遺物の分布を示す草創期や早期の遺跡の存在形態とは大きな差異が認められる。しかし、本庄台地面においては前期の遺跡は極めて少なく、遺物の出土も稀である。このように、この地域は縄紋前期に入って丘陵部を中心に急速に定住的な集落を伴う土地の用益形態へと移行したことを推定することができるが、前期末葉では再び遺跡数は減少に転じている。

縄紋中期では、平坦な本庄台地面において将監塚遺跡（38：石塚他 1986）、古井戸遺跡（39：宮井他 1989）や新宮遺跡（42：恋河内 1995）等の大規模な環状集落が隣接して設営されることが特徴的であるが、児玉丘陵部においても塩谷平氏ノ宮遺跡（恋河内他 2006）、宮内上ノ原遺跡（鈴木他 2006 他）等の集落遺跡が数多く確認されている。このように縄紋中期でも後半期を中心に大規模な環状集落が本庄台地面に集中し、あるいは丘陵部への分布が認められるとはいえ、集落遺跡の分布自体は必ずしも特定の地形区分に偏在するのではなく、橋ノ入遺跡（鈴木他 1986）、塔ノ入遺跡（鈴木他 2007）等



1. 児玉大天白 2. 児玉清水 3. 児玉大久保 4. 宮下 5. 水殿瓦窯跡 6. 樋之口 7. 宮ヶ谷戸 8. 生野山 9. 阿知越 10. 御林下 11. 児玉仲町
 12. 高縄田 13. 金佐奈 14. 樋越 15. 鶴時 16. 石橋 17. 宮田 18. 南街道 19. 辻堂 20. 共和小学校校庭 21. 日延 22. 城の内 23. 新屋敷 24. 東田
 25. 浅見塚 26. 鷺山 27. 浅見塚北 28. 左口 29. 柿島 30. 東牧西分 31. 梅沢 32. 川越田 33. 今井川越田 34. 前田甲 35. 藤蔭 36. 堀向 37. 将監塚
 東 38. 将監塚 39. 古井戸 40. 平塚 41. 中下田 42. 新宮 43. 辻ノ内 44. 真下塚
 A. 長沖古墳群 B. 下町大久保古墳群 C. 広木大町古墳群 D. 生野山古墳群

図2 児玉大天白遺跡の位置と周辺の遺跡

の山地域や、河内下ノ平遺跡（松澤 2005）のような山間の河岸段丘上でも確認されており、その分布密度には差が認められるものの市域全体に広範囲に分布している。なお、児玉丘陵部の賀家上遺跡をはじめ、生野山丘陵では物見塚古墳の付近から小規模な集落が、また浅見山丘陵においても大久保山遺跡Ⅱ区（昆 2001）等において中期の遺構が検出されており、中期中葉以前の遺物の出土が確認されていることも、前期集落からの占地傾向の変遷を考える上では注目しておくべきである。これらは遺跡の一部の調査にとどまっているが、その占地からいづれも本庄台地面の集落群と比肩しうような大規模な集落と考えることは難しいであろう。ともあれ、この地域の大規模な環状集落の分解

は、「加曾利EⅢ式」頃から始まると考えてよいが、将監塚・古井戸遺跡等の本庄台地面の大規模集落の周辺には、該期の小規模な集落遺跡が検出されている。例えば、本庄台地に近接する低地内の微高地には、平塚遺跡（40：鈴木1997）、中下田遺跡（41：鈴木1991）、西富田前田遺跡（増田1989）、七色塚遺跡（恋河内2008）等がともに「加曾利EⅢ式」以降の時期であることは注意すべきであり、中期末における占地傾向の変化の過程の一端を窺わせる。ともあれ、このように縄紋中期の集落跡が多様な地形区分に比較的等質な分布を示すことは、特定の生態的環境に直接依存するのではなく、様々な土地においても適応が可能な比較的等質な経済活動のあり方を想起させるものである。したがって、本遺跡の占地もまた、このような縄紋中期の占地傾向の流れの中で捉えるべきものと思われる。

縄紋後・晩期では、丘陵部や山地域の遺跡においては、零細な資料が検出されるに過ぎない状況へと変化している。女堀川流域の低地内の微高地に位置する南街道遺跡（18：恋河内1996）では、称名寺I b式期の土壌が検出されているが、縄紋中期後半以来の占地傾向を継承しているようである。縄紋後期初頭以降に継続する集落は、小河川の河道低地に接して占地する古川端遺跡（鈴木1978）や藤塚遺跡（35：鈴木他1997）、あるいは「藤池」等の湧水点に接して占地する吉田林女池遺跡（恋河内2001・2004）が確認されている。なお、本遺跡にほど近い「思池」湧水地の西側に隣接する児玉清水遺跡（2：鈴木他2007）もこれらと同様な占地をとるものであり、縄紋後・晩期においては、湧水点や小河川に面する比較的低位の地点に集落遺跡が位置していることに注目しておくべきであろう。このような遺跡の占地形態は、該期における丘陵部や山地域での遺跡数の急速な減少とともに、土地利用形態の変化とも相関があるものと思われる。このように縄紋後・晩期の集落遺跡は、河川や湧水地をもつ小支谷に接する占地をもち、中期と比較して低地域を集落の周辺に広く取り込んだ占地を採用していることは極めて特徴的である。

本庄市域における弥生時代の遺跡は少なく、中期までの遺跡は小山川流域等に小規模な遺跡が点在する状況であるが、後期には児玉丘陵や生野山・浅見山等の谷戸を臨む丘陵部に小規模な集落跡が増加しており、谷水田の開発を前提とした占地であったと推定することができる。古墳時代前期に入ると集落遺跡が増加するが、これは低地域の開発が急速に進展するためである。この開発は、主として生野山丘陵以北の女堀川流域の低地域の灌漑を伴うものであり、後張遺跡群をはじめとする大規模な集落が形成される。このような低地域の開発と集落の設営に伴って鷺山古墳をはじめとする古式古墳が相次いで築造されることは注目すべき点である。こうした集落遺跡の占地の傾向は、古墳時代中期以降においても継続するとともに、丘陵部にも次々と集落が出現し開発が進んでいる状況を推定することができる。

本遺跡の位置する生野山丘陵以南の区域においては、下町・大久保古墳群（B）の存在が知られており、現在は「萩塚^{はぎづか}」と呼ばれる横穴式石室をもつ円墳1基のみが残存しているが、かつては数多くの古墳が存在していたようである。また、古墳時代後期以降の集落遺跡は、児玉清水遺跡（2：鈴木他2006）のほか、古墳時代後期から平安時代にかかる集落跡である児玉大久保遺跡（3：恋河内2003・桜井2004・瀬田2010）が確認されている。これらの集落の形成時期は、古墳時代後期の6世紀代を主体とし、7世紀から奈良時代においては集落が衰退するものと推定される。生野山丘陵以南においては律令期の集落は比較的少なく、大規模な集落は、神流川からの導水にかかる「九郷用水」によって灌漑が開始された児玉条里遺跡（鈴木1998他）をはじめとする条里水田を臨む平坦な台地

上に展開していることは特徴的である。この律令期における児玉郡における集落の占地や水田の景観の形成は、計画的かつ構造的に進行したことを示しており、9世紀後半以降では、これらの計画的な集落は分解の方向を辿り、丘陵部をはじめ本遺跡周辺の生野山丘陵南側の区域等に新しく進出するようである。このような過程で、平安時代においては集落形成が再び活発となり、9世紀後半から10世紀後半頃の住居跡群が確認されている。

本遺跡の占地する生野山丘陵以南の区域は、児玉党系の在地領主である「児玉氏」の本貫地に相当しており、その経済基盤となった中核的領域が、このように小山川（旧身馴川）に沿った区域に相当していることは注目しておくべき点である。これらの区域は、基本的に「九郷用水」灌漑区域である条里形地割をもった水田区域の外部に属している。このような条里形地割をもつ水田地帯の外部に位置する系統的な灌漑体系の外の区域が、児玉党系「児玉氏」の第一次的な経済基盤であったことは、彼らの開発の過程の一端を物語るものであると考えることができる。なお、本遺跡の西方約900 mには、「鎌倉街道^{かみつみち}上道」が通っており、鎌倉時代以降、「児玉」においては宿と市が発達していたと推定されることにも注目しておくべきであろう。ちなみに、本遺跡の北側には、かつて「深谷道」とされた県道熊谷－児玉線が通っているが、古くは児玉本町の法養寺付近で「鎌倉街道^{かみつみち}上道」から分岐する「大道^{おおみち}」という古道が、本遺跡付近で合流して東方向に延びていることにも注目しておくべき点である。

なお、先に見たように、本遺跡付近には湧水を貯水した溜池が点在しており、西側の谷戸にこの水源によって灌漑された水田が展開しているが、この溜池の用水は灌漑用水としては潤沢ではなく、近代においても大規模な水田は拓かれていない状況であった。この生野山丘陵以南の地域の灌漑用水の不足は、昭和十二年に完成した間瀬堰堤に貯水された児玉用水（現美児沢^{みこざわ}用水）の「児玉水路」によって既存の用水路に導水されることによって確保されたのである。このように本遺跡の位置する本庄市児玉町児玉の区域は、基本的に「九郷用水」の灌漑区域の外部に位置し、灌漑用水に比較的乏しく水田の少ない畑地が卓越する区域であるが、湧水点が点在しこれらを縄文時代の生活用水として捉え返すならば十分に潤沢な区域に相当していると推定しえることは、本遺跡の占地を考える上で注目しておくべき点であろう。

なお、大天白遺跡の遺跡名のもととなった「大天白」という小字名は、所謂「天白信仰」に関わる地名と考えることができるものであるが、「天白信仰」については中部東海地域を中心とする在地的な信仰とされており不明な点が多い。この大天白は、風水除けの神とも星に関わる神ともいわれているが、現在この区域では具体的な信仰や行事は残されていない。

(鈴木徳雄)

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

調査区内に堆積する表土は重機を用いて掘削した。表土除去後、縄文時代の遺物包含層が確認されたため、人力による掘削を行なった。遺構確認の際にはプランが不明瞭であったため、適宜サブトレンチを設定し、遺構の重複や掘り込みの観察に努めた。遺構については移植ゴテを使用し、慎重に覆土の除去を行なった。平面図・断面図は手実測によって作成した。また、調査区内に2箇所のベンチマークを打設し、レベルを用いて遺跡内の標高を計測した。

整理作業は遺物の洗浄・注記を行なった後、土器に関してはセメダインCによって接合を行なった。遺物の実測は原寸で実施し、適宜拓本の採拓を行なった。また、遺物の写真撮影には6×7版のモノクロフィルムを使用した。実測完了後、ロットリングペンによるトレースを行ない、版下の作成に着手した。また、図面の作成が終了次第、原稿執筆および編集作業を行なった。

2 調査の経過

発掘調査は平成6年11月22日から平成7年2月28日にかけて実施した。調査経過、および整理作業の期間は以下に示すとおりである。

発掘調査の準備を終了後、平成6年12月6日に重機による表土掘削を開始する。翌日より作業員を動員し、表土掘削と並行して試掘溝内の精査および遺物包含層の調査を開始する。27日：調査区西側で住居跡のプランが確認される。平成7年1月12日：住居跡SI01～03の調査を開始。2月7日：SI04・05の調査を開始。27日：全体図の測量が終了。28日：器材の撤収を行ない、現地にかかる調査は終了した。整理作業は平成21年5月7日から開始し、平成22年6月30日に終了した。

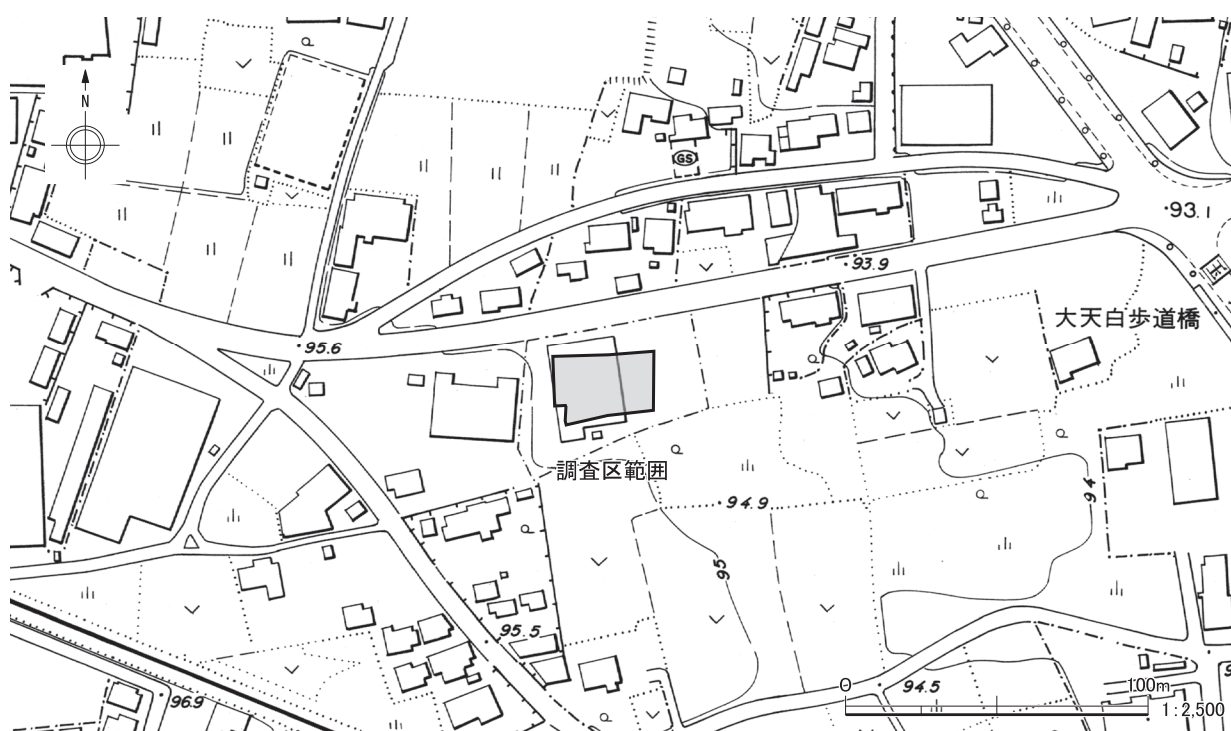


図3 調査地点

IV 検出された遺構と遺物

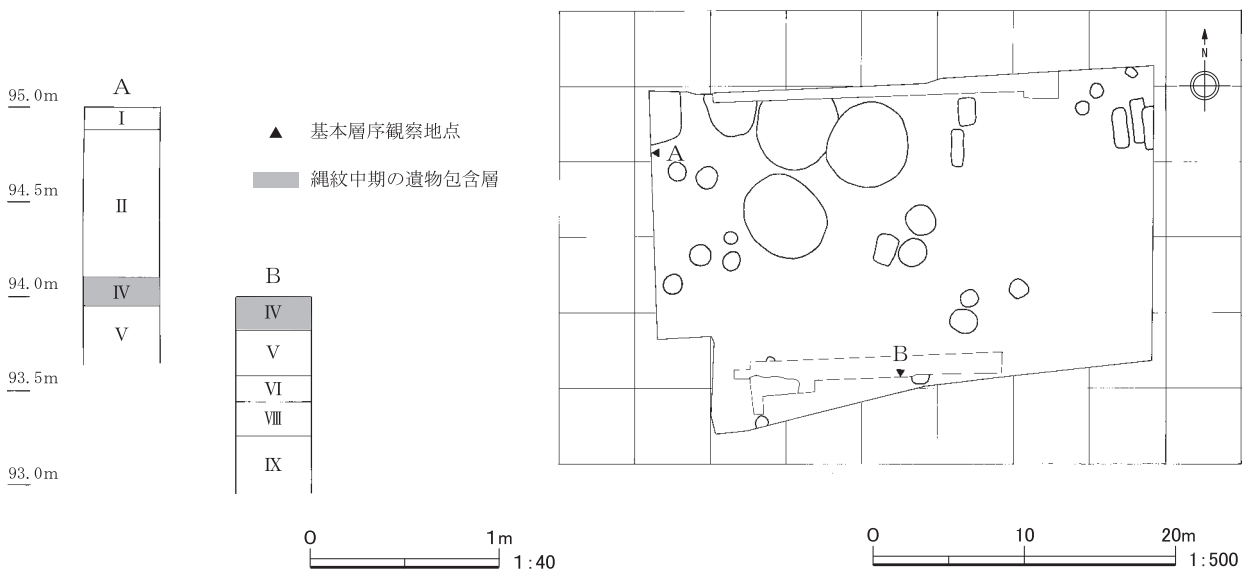
1 遺跡の概要

児玉大天白遺跡は、北側に生野山丘陵を控えた小山川左岸の自然堤防上に立地している。北側に女堀川、南側には小山川が北流する。遺跡の地形は標高 93.6 ~ 94.0 m の微高地であり、西から東へ向かって緩やかに標高を減じている。

検出された遺構は竪穴住居跡 5 軒、土坑 20 基、ピット 3 基、遺物包含層 2 面である。竪穴住居跡、および遺物包含層の所属時期は縄紋時代中期中葉（阿玉台 I b 式 ~ II 式期）にほぼ限定され、比較的短期間に継続した集落と考えられる。出土遺物は縄紋土器が 9 割以上を占め、少量の土製品と石器が見られる。その他、古代以降の遺物として極少量の土師器・須恵器・瓦・陶器・土製品などが出土している。

2 基本層序

基本層序は I ~ IX 層に分かれる。I ~ III 層は現代の層である。I・II は整地層で 0.9 ~ 1.0 m の厚さで堆積する。III 層は耕作土である。A s - A を少量含み、調査区の一部でのみ確認された。20 ~ 25 cm の厚さで堆積し、他は整地に伴う削平によって失われたと考えられる。IV 層は縄紋時代中期の遺物包含層である。多量の遺物を包含し、特に竪穴住居跡が集中する調査区北西部で遺物の密度が高い。また、SI - 01 は本層上面からの掘り込みが確認できた。V 層は IV 層と基本的な組成は同一であるが、白色粒子が多く、色調がやや明るい。本層上面が遺構の確認面であり、縄紋時代の遺物を少量包含する。VI 層は明黒褐色を呈し、締まり、粘性ともに強い。VII・VIII 層は部分的に確認でき、面的には広がっていない。IX 層は茶褐色を呈する砂層である。



基本層序土層説明

- I 砕石 現代の整地層。
- II 盛土 現代の整地層。
- III 暗褐色土 現代の耕作土。A s - A を少量含む。調査区のごく一部にのみ残存。
- IV 暗茶褐色土 締まり強く、粘性あり。細岩片、白色粒子を少量均一に含む。縄紋時代の遺物を多量に包含する。
- V 暗茶褐色土 締まり強く、粘性あり。白色粒子をIV層より多く均一に含む。縄紋時代の遺物を極少量包含する。
- VI 明黒褐色土 締まり・粘性ともに強い。含有物はほとんどない。
- VII 暗茶褐色土 VI層とIX層が混ざり合った様相を呈する。
- VIII 暗灰色砂礫 大小の礫を主体とし、砂粒を間に有する。
- IX 茶褐色砂 締まり強く、粘性弱い。粒子の細かい砂層。

図4 基本層序

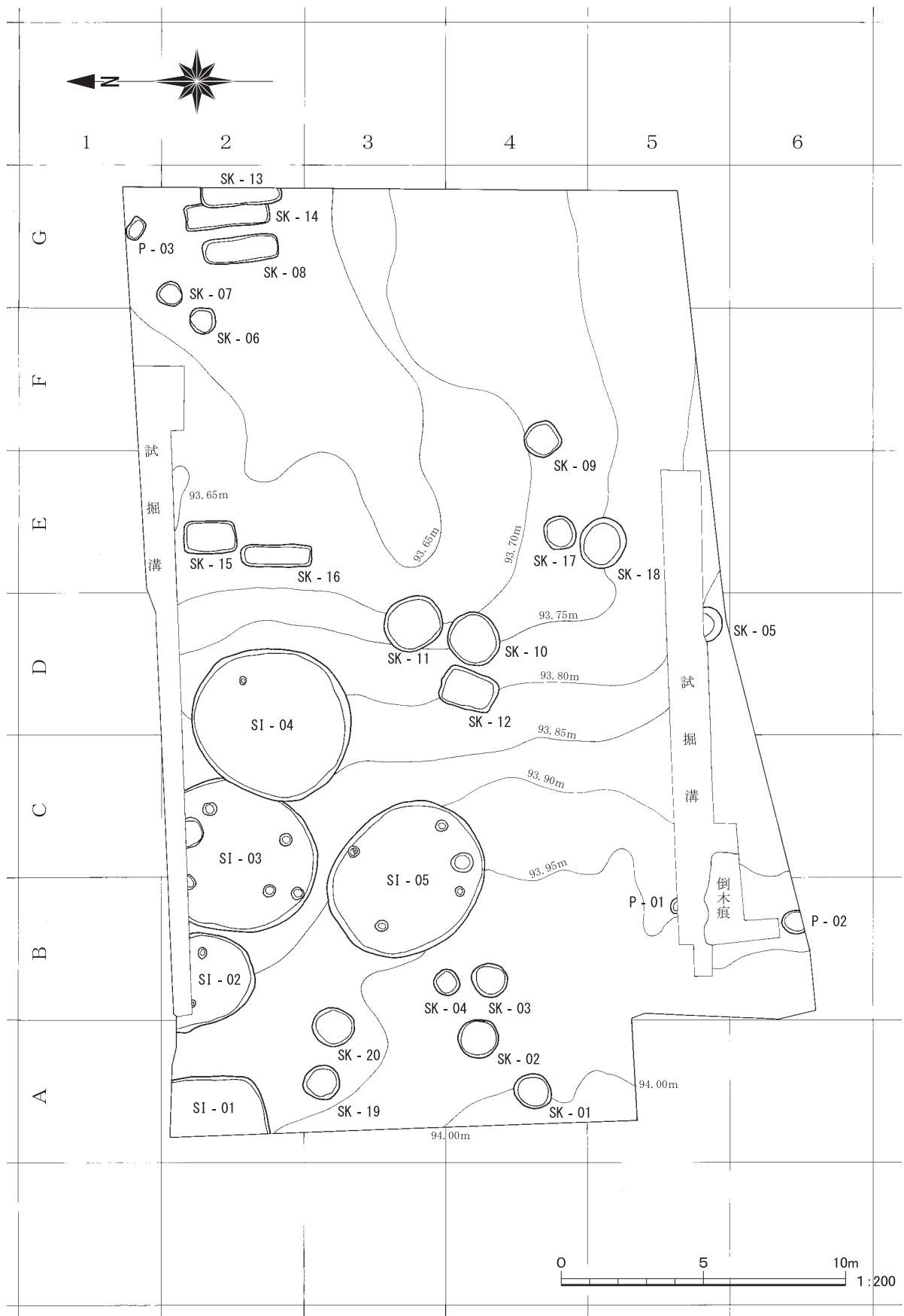


図5 調査区全体図

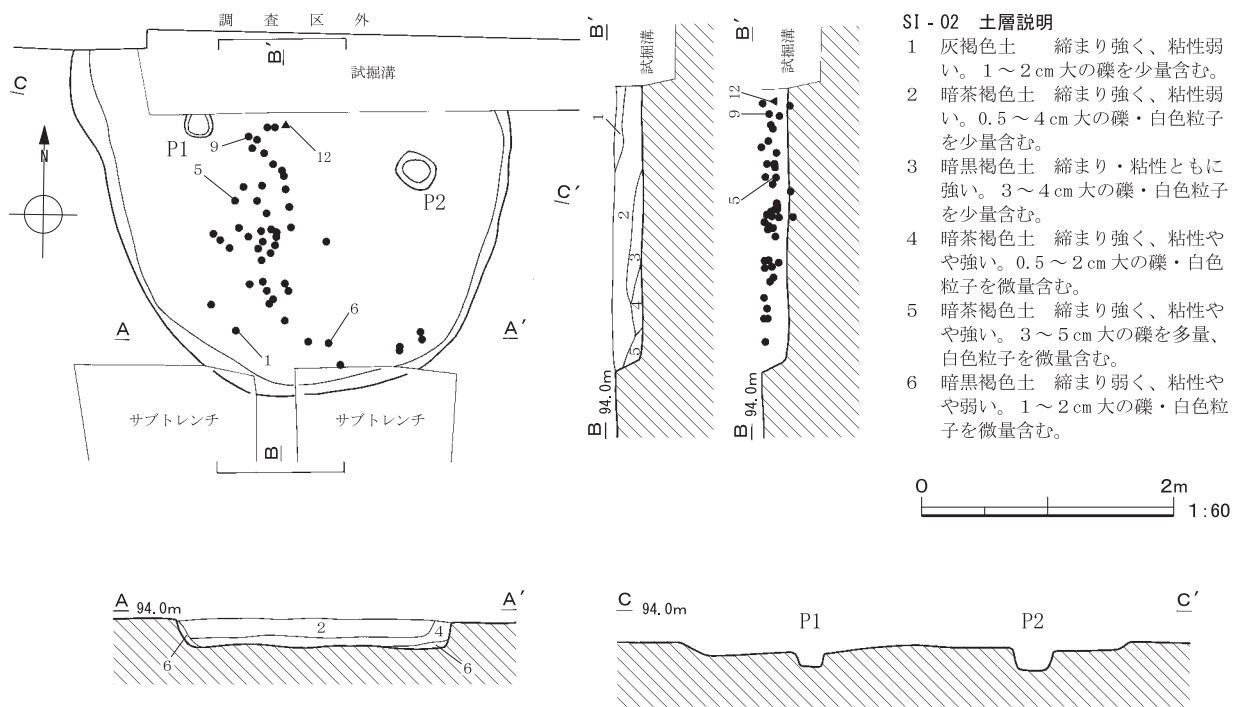


図7 SI-02



図8 SI-02 出土遺物 (1)

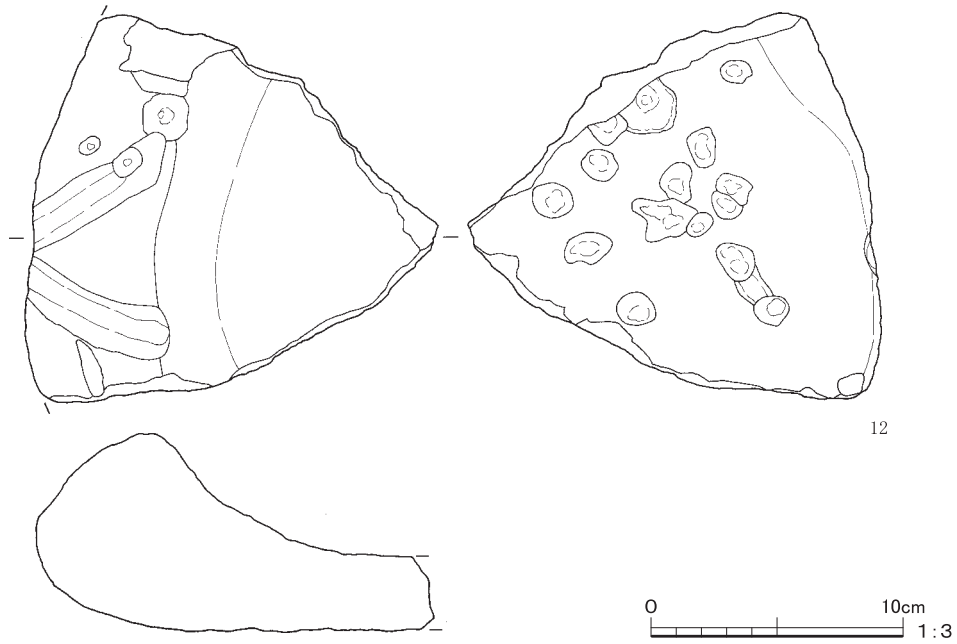


図9 SI-02 出土遺物(2)

表1 SI-02 出土遺物観察表

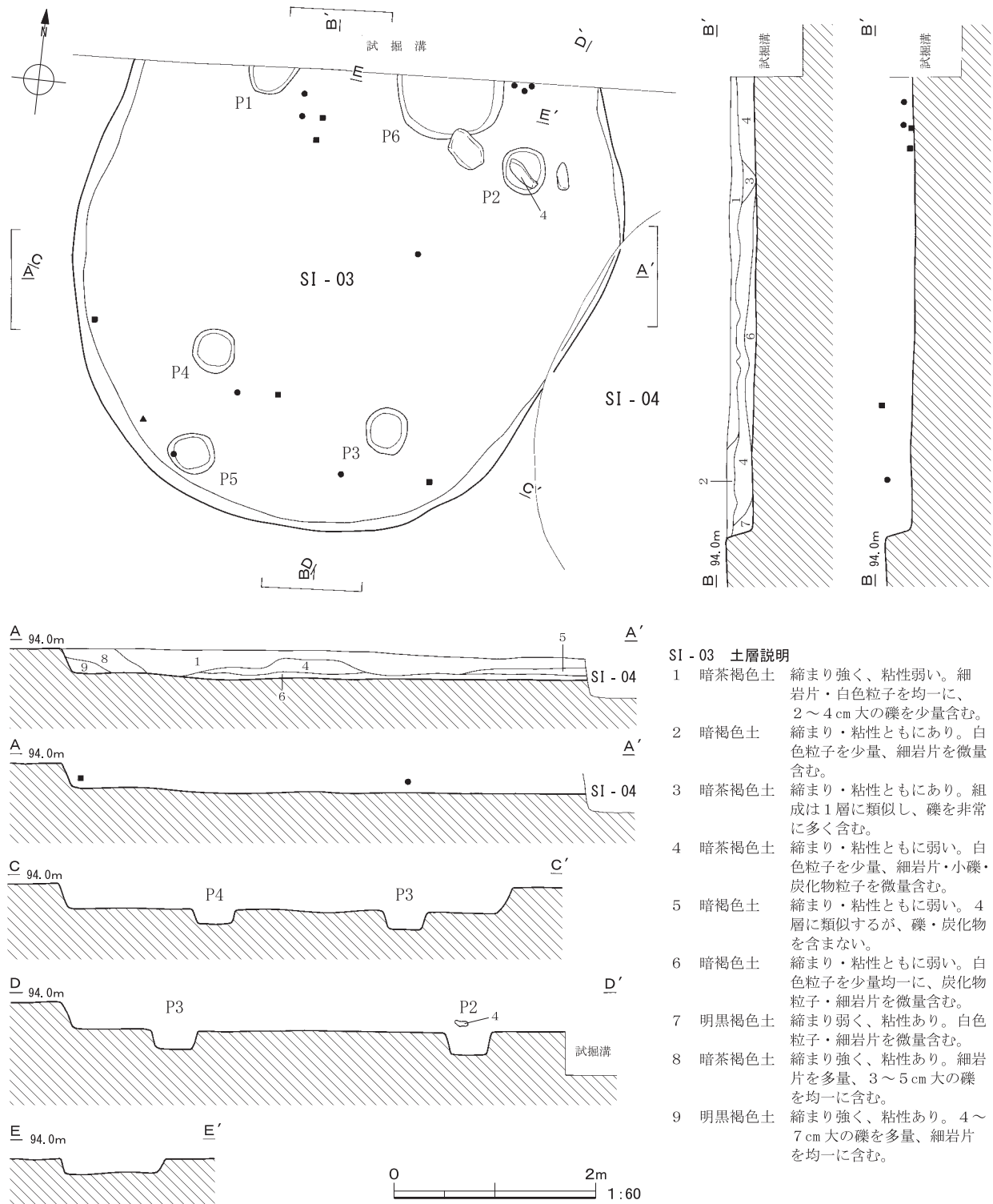
No.	器種	特徴・計測値 (cm・g)	①胎土 ②色調	備考
1	縄紋土器 深鉢	波状口縁。環状突起。突起・突帯・隆帯で杵状区画→口唇部、区画脇・内に単列の角押紋。内面は横位のナデ。	①雲母 ②暗褐色	阿玉台 I b 式
2	縄紋土器 深鉢	平口縁。突起・突帯・隆帯で杵状区画→口唇部・突帯・区画脇に単列の角押紋。内面は横位のナデ。	①多量の雲母 ②にぶい褐色	阿玉台 I b 式
3	縄紋土器 深鉢	平口縁カ。突帯・隆帯で杵状カに区画→区画内に横位連続爪形紋。内面はナデ。	①多量の石英・雲母 ②にぶい褐色	阿玉台式
4	縄紋土器 深鉢	屈曲する縦位の垂下隆帯→横位連続爪形紋。内面はナデ。	①多量の石英・雲母 ②明黄褐色	阿玉台式
5	縄紋土器 深鉢	波状口縁。環状突起。口唇下に角押紋。内面は横位のナデ。	①片岩 ②明赤褐	勝坂 1 式
6	縄紋土器 深鉢	平口縁。突起・突帯・隆帯で杵状区画→区画脇・内に半截竹管状工具による内皮痕が残る沈線→竹管による刺突列。内面は横位のナデ。	①片岩 ②にぶい赤褐	勝坂 1 式
7	縄紋土器 深鉢	隆帯で区画→区画脇に半截竹管状工具による沈線・爪形紋・三角押紋。区画内に三叉紋カ・刺突。内面はナデ。	①片岩 ②にぶい赤褐	勝坂 1 式
8	縄紋土器 深鉢	隆帯で三角形区画→隆帯上・脇に幅広角押紋。区画内に三叉紋カ。内面はナデ。	① - ②橙	勝坂 1 式
9	縄紋土器 深鉢	半截竹管状工具による沈線で横位区画→区画脇に爪形紋→区画内に区画と同様の工具による波状紋。内面は横位のナデ。	①角閃石 ②橙	勝坂 1 式
10	土製品 土製円盤	沈線・交互刺突による複合鋸歯紋カ→沈線沿いに細い竹管による刺突列。裏面はナデ。側面に磨痕。長径：3.6cm・短径：3.4cm・厚さ：0.8cm・重さ：12.0g。	①赤色片岩 ②橙	五領ヶ台式
11	石器 石匙	摘み部に調整痕が集中。表面の刃部に丁寧な剥離痕。素材：礫皮を持つ薄い小型剥片。石材：チャート。長さ：3.0cm・幅：3.9cm・厚さ：0.8cm・重さ：5.8g。	-	
12	石器 石皿	皿面に著しい磨耗痕。縁部に溝状の窪み・凹穴。裏面に浅い(3~5mm)凹穴。欠損。石材：安山岩。長さ：(15.3)cm・幅：(16.3)cm・厚さ：7.8cm・重さ：1734.8g。	-	

SI - 03 (図 10・11、表 2 / 写真図版 1)

位置：B 2・C 2 グリッドに位置し、V 層上面で確認された。SI - 04 と重複し、本遺構が古い。

形状：円形を呈すると推定される。確認された範囲では長軸 5.57 m 以上、短軸 5.07 m を測る。

構造：壁はやや急に立ち上がる。遺構確認面からの深さは 20 ~ 29 cm を測る。底面は全体を通して平坦である。覆土は自然堆積の様相を呈し、暗茶褐色土を主体とする。柱穴は P1 ~ P5 の 5 本が確認された。



SI - 03 土層説明

- 1 暗茶褐色土 締まり強く、粘性弱い。細岩片・白色粒子を均一に、2 ~ 4 cm 大の礫を少量含む。
- 2 暗褐色土 締まり・粘性ともにあり。白色粒子を少量、細岩片を微量含む。
- 3 暗茶褐色土 締まり・粘性ともにあり。組成は1層に類似し、礫を非常に多く含む。
- 4 暗茶褐色土 締まり・粘性ともに弱い。白色粒子を少量、細岩片・小礫・炭化物粒子を微量含む。
- 5 暗褐色土 締まり・粘性ともに弱い。4層に類似するが、礫・炭化物を含まない。
- 6 暗褐色土 締まり・粘性ともに弱い。白色粒子を少量均一に、炭化物粒子・細岩片を微量含む。
- 7 明黒褐色土 締まり弱く、粘性あり。白色粒子・細岩片を微量含む。
- 8 暗茶褐色土 締まり強く、粘性あり。細岩片を多量、3 ~ 5 cm 大の礫を均一に含む。
- 9 明黒褐色土 締まり強く、粘性あり。4 ~ 7 cm 大の礫を多量、細岩片を均一に含む。

図 10 SI - 03

柱穴の径は39～49cmを測り、床面からの深さは12～21cmを測る。P1～P4は四隅に配置されるが、P5は南側の壁際に位置する。また、P1とP2の間には円形と推定される土坑（P6）が設けられている。P6は径1.08m以上を測り、深さは12～16cmを測る。

遺物:覆土中から縄紋土器231点(2,668g)、石器8点(6,466.1g)が出土した。縄紋土器は阿玉台式45点、勝坂式47点、時期不明139点が確認され、阿玉台式はI b式とII式が同程度の割合で出土している。また、勝坂式は1式を主体とする。石器は打製石斧1点、スクレイパー1点、凹石1点、剥片3点、台石1点が確認された。その他、P2周辺からは棒状の礫1点、P6の周辺からは被熱した大型の礫が1点出土している。

所属時期:出土遺物から縄紋時代中期中葉の阿玉台I b～II式期に所属すると考えられる。

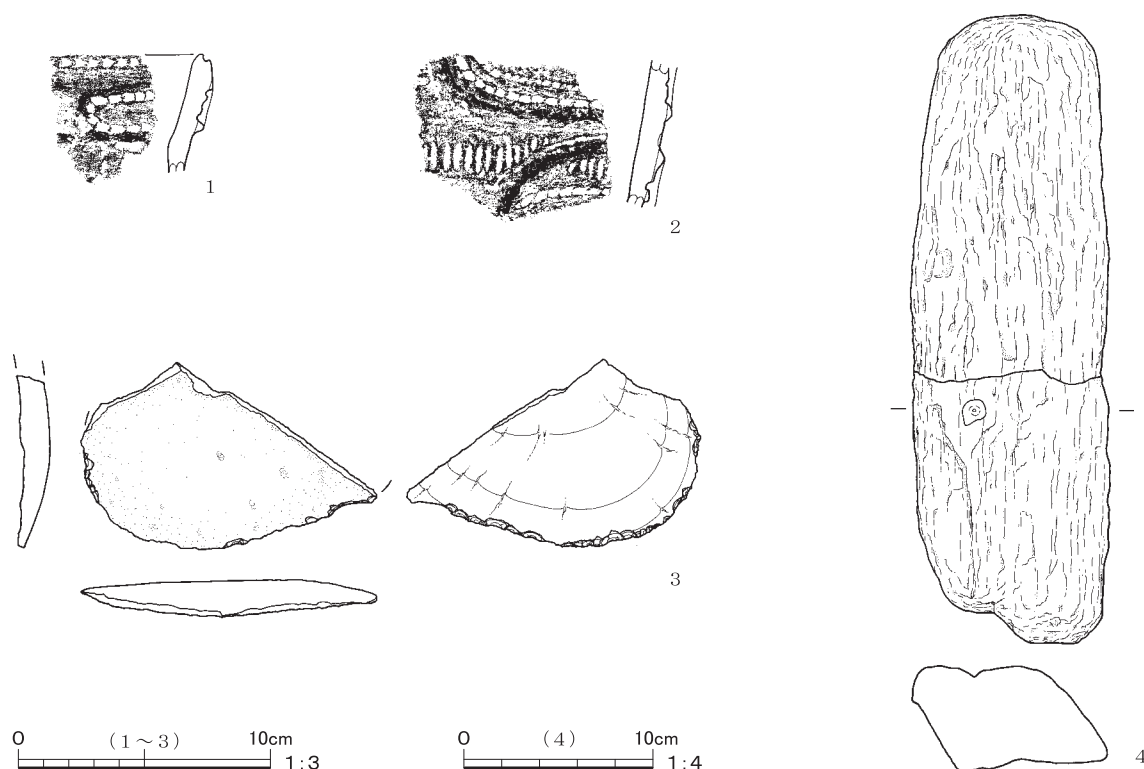


図11 SI-03 出土遺物

表2 SI-03 出土遺物観察表

No.	器種	特徴・計測値 (cm・g)	①胎土 ②色調	備考
1	縄紋土器 深鉢	平口縁。隆帯で杵状区画→口唇部、区画脇に単列の角押紋。内面は横位のナデ。	①多量の石英・雲母 ②灰黄褐色	阿玉台I b式
2	縄紋土器 深鉢	横位連続爪形紋→隆帯で区画→区画脇・内に複列の角押紋。内面は横位のナデ。	①多量の石英・雲母 ②明赤褐色	阿玉台II式
3	石器 スクレイパー	縁辺に小型剥離痕。その周辺に磨耗痕。上部～右側縁部にかけて欠損。素材:礫皮を持つ薄い横長剥片。石材:砂岩。長さ:(7.4)cm・幅:(11.6)cm・厚さ:1.5cm・重さ:94.1g。	—	
4	石器 台石	一部に漏斗状の凹穴。石材:結晶片岩。長さ:33.3cm・幅:10.5cm・厚さ:5.5cm・重さ:3055.8g。	—	

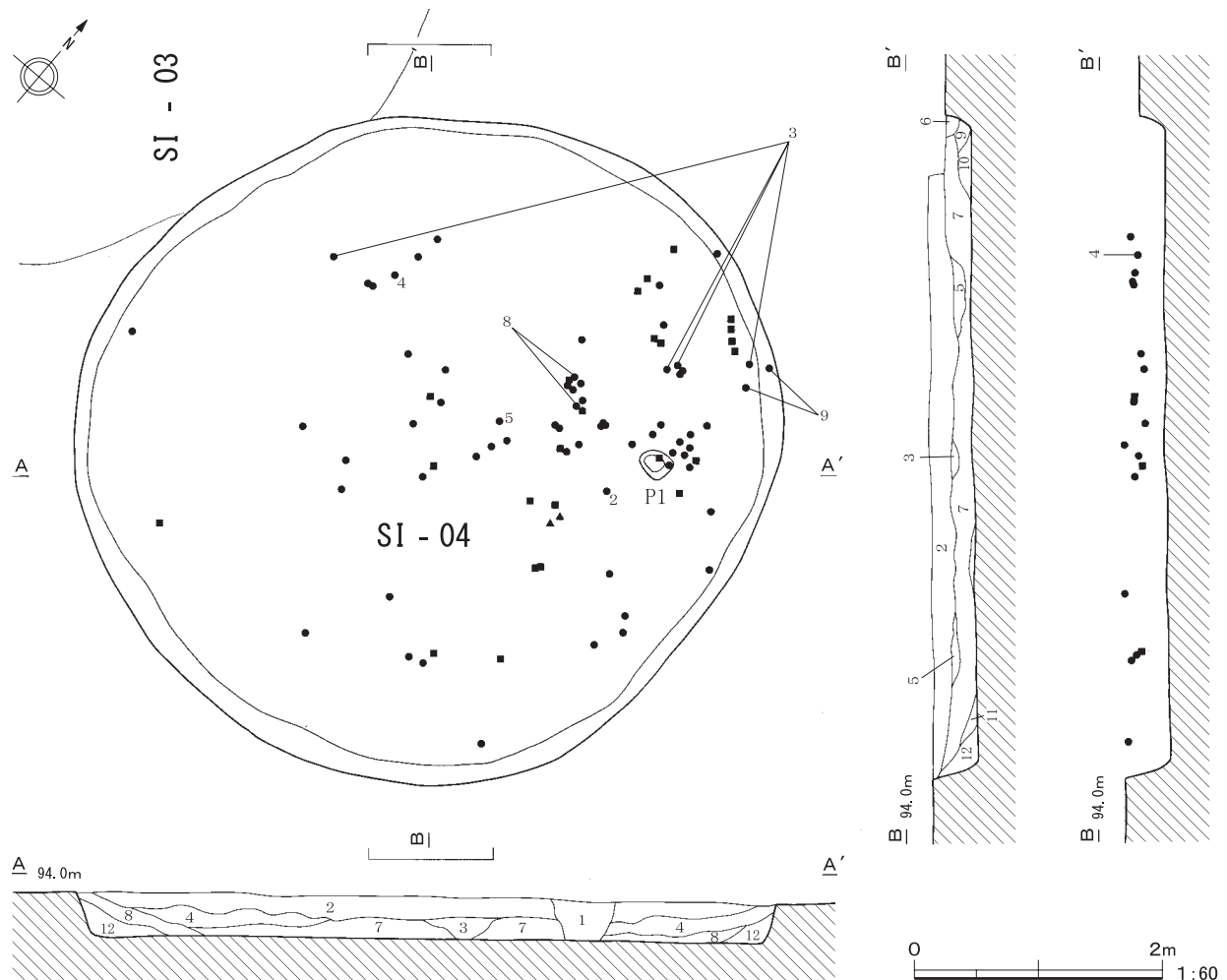
SI - 04 (図 12・13、表 3・4 / 写真図版 1・2)

位置: C 2 ~ 3、D 2 ~ 3 グリッドに位置し、V 層上面で検出された。SI-03 と重複し、本遺構が新しい。

形状: 円形を呈する。長軸 5.62 m 以上、短軸 5.29 m を測る。

構造: 壁はやや急に立ち上がる。遺構確認面からの深さは 33 ~ 36 cm を測る。底面は全体を通して平坦である。覆土は自然堆積の様相を呈し、暗茶褐色土を主体とする。柱穴は 1 本が確認された。柱穴の径は 22 ~ 27 cm を測り、床面からの深さは 8 cm を測る。

遺物: 覆土中から縄紋土器 475 点 (8,729g)、石器 9 点 (386.4g) が出土した。竪穴住居跡の中では最も遺物の出土量が多い。縄紋土器は阿玉台式 110 点、勝坂式 90 点、加曾利 E 式 28 点、時期不明 246 点 が確認され、阿玉台式がやや多い。阿玉台式は II 式を、勝坂式は 1 式を主体とする。加曾利 E 式は E III 式を主体とするが、混入と考えられる。



SI - 04 土層説明

- | | | | |
|---------|---|----------|---|
| 1 暗茶褐色土 | 締まり強く、粘性弱い。白色粒子・橙色粒子・細岩片を少量、小礫を若干含む。 | 8 明黒褐色土 | 締まり・粘性ともにあり。白色粒子・橙色粒子・5 ~ 10cm 大の礫を少量均一に含む。 |
| 2 暗茶褐色土 | 締まり強く、粘性あり。細岩片を多量、白色粒子・小礫を少量、橙色粒子を微量含む。 | 9 暗褐色土 | 締まり弱く、粘性あり。細岩片を若干、炭化物粒子を微量を含む。 |
| 3 暗茶褐色土 | 締まり強く、粘性あり。組成は 2 層に類似するが、小礫をより多く含み、細岩片は少ない。 | 10 明黒褐色土 | 組成は 8 層に類似するが、礫は含まない。 |
| 4 暗茶褐色土 | 締まり強く、粘性あり。白色粒子を均一に、細岩片を多量に、小礫を微量に含む。 | 11 明黒褐色土 | 締まり・粘性ともに弱い。橙色粒子を微量に含み、茶褐色土を若干混入する。 |
| 5 暗褐色土 | 締まり・粘性ともにあり。白色粒子・小礫を少量含む。 | 12 明黒褐色土 | 締まり・粘性ともにあり。白色粒子・炭化物粒子を少量、細岩片を微量含む。 |
| 6 黒褐色土 | 締まり・粘性ともに弱い。小礫を若干含む。 | 13 茶褐色土 | 締まりあり、粘性強い。白色粒子・橙色粒子を少量含む。 |
| 7 暗褐色土 | 締まり・粘性ともに強い。白色粒子・炭化物粒子を少量均一に、細岩片・小礫を微量含む。 | | |

図 12 SI - 04

石器は打製石斧3点、スクレイパー2点、剥片4点が確認された。

所属時期：出土遺物から縄紋時代中期中葉の阿玉台Ⅱ式期に所属すると考えられる。



図 13 SI-04 出土遺物

表 3 SI - 04 出土遺物観察表 (1)

No.	器種	特徴・計測値 (cm・g)	①胎土 ②色調	備考
1	縄紋土器 深鉢	平口縁。突起に丸棒状工具によるキザミ。突起・突帯・隆帯で杵状区画→区画脇・内に単列の角押紋。内面は横位のナデ。	①雲母 ②褐色	阿玉台Ⅰb式
2	縄紋土器 深鉢	平口縁。帯状突起。突起・突帯・隆帯で杵状区画。内面は横位のナデ。	①多量の石英・雲母 ②橙色	阿玉台Ⅰb式
3	縄紋土器 深鉢	平口縁。突帯・隆帯で杵状区画→区画脇に半截竹管状工具による押引紋。内面は横位のナデ。口径：31.7cm。	①多量の石英・雲母 ②褐色	3・4は同一個体カ。 阿玉台Ⅱ式
4	縄紋土器 深鉢	隆帯で横位区画→蛇行する縦位の垂下隆帯→区画脇に半截竹管状工具による押引紋。内面は縦位のナデ。	①多量の石英・雲母 ②褐色	3・4は同一個体カ。 阿玉台Ⅱ式
5	縄紋土器 深鉢	隆帯→隆帯上にヘラ状工具によるキザミ。隆帯脇等に半截竹管状工具による複列の角押紋。内面は斜位のミガキ。	①雲母 ②にぶい橙色	阿玉台Ⅱ式
6	縄紋土器 深鉢	隆帯で三角形状区画→区画脇に幅広角押紋・三角押紋→区画内に玉抱き三叉紋。内面は縦位のミガキ。	①— ②橙色	勝坂Ⅰ式

表4 SI - 04 出土遺物観察表 (2)

No.	器種	特徴・計測値 (cm・g)	①胎土 ②色調	備考
7	縄紋土器 深鉢	半截竹管状工具による沈線で杵状カに区画→区画脇に爪形紋。内面は横位のナデ。	①角閃石 ②橙色	勝坂1式
8	縄紋土器 深鉢	三角押紋で横位区画→区画内に同様の工具による渦巻紋・鋸歯紋。内面は縦位のナデ。	①片岩 ②赤褐色	勝坂1式
9	縄紋土器 深鉢	平底。内・外面共に横位のナデ。底面に網代痕。底径:[11.5]cm。	①多量の石英・雲母 ②橙色	阿玉台式
10	縄紋土器 ミニチュア土器	外面は縦位、内面は横位のナデ。底面に窩文。口径:3.2cm・底径:2.6cm・器高:3.5cm。	①片岩 ②赤褐色	中期中葉
11	石器 スクレイパー	表裏面の2側縁に微細剥離痕・磨耗痕。素材:礫皮を持つ薄い縦長剥片。石材:頁岩。長さ:4.3cm・幅:3.4cm・厚さ:0.9cm・重さ:10.3g。	—	—
12	石器 打製石斧	短冊形。側縁に垂直打撃による剥離調整。刃部・側縁部周辺に磨耗痕。上部欠損。素材:礫皮を持つ剥片。石材:砂岩。長さ:(8.6)cm・幅:5.2cm・厚さ:(3.0)cm・重さ:151.2g。	—	—

SI - 05 (図14)

位置: B3~4、C3~4グリッドに位置し、V層上面で検出された。

形状: 円形を呈する。長軸5.7m、短軸4.94mを測る。

構造: 壁はやや急に立ち上がる。遺構確認面からの深さは26~32cmを測る。底面は全体を通して平坦

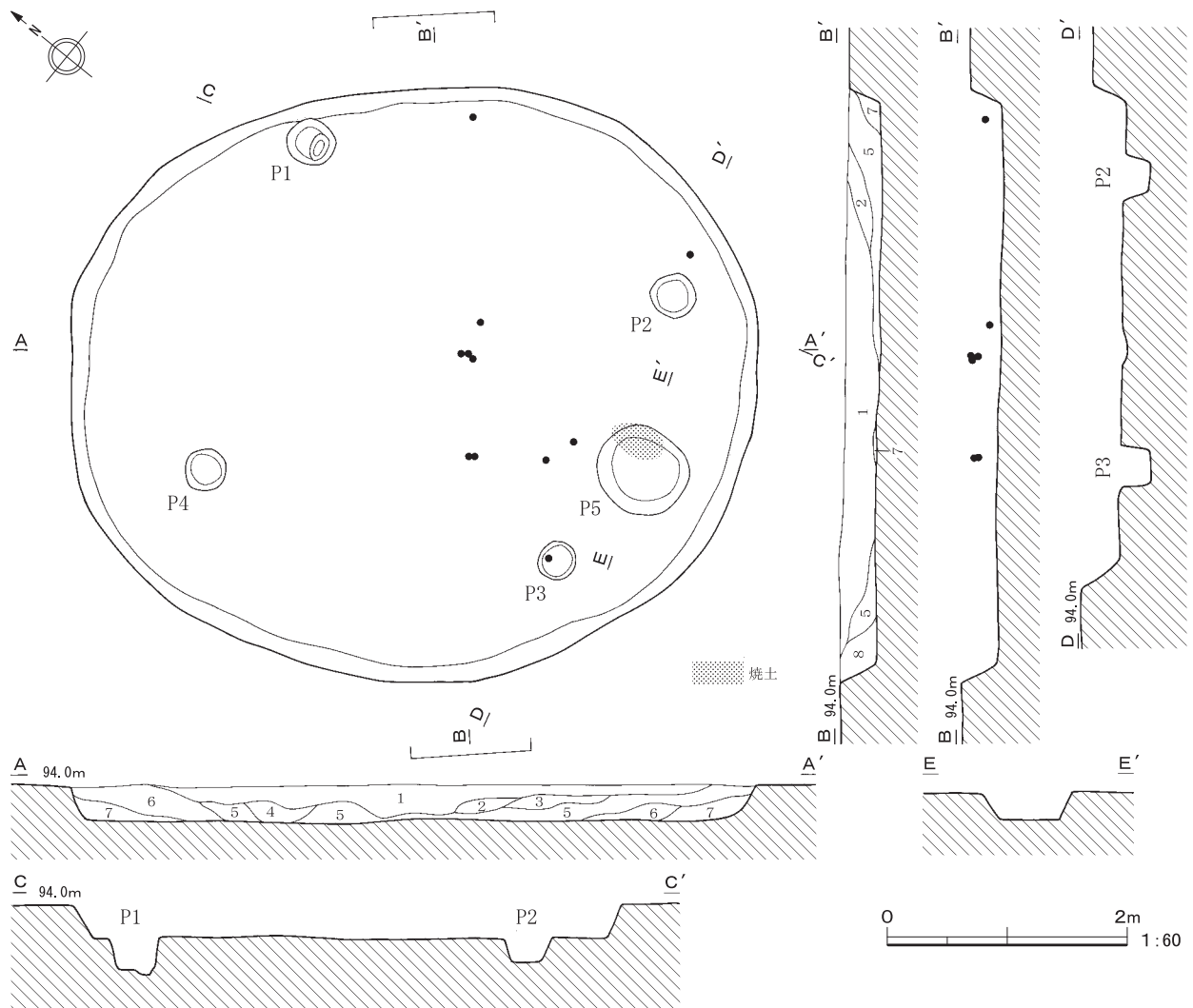


図14 SI - 05

S1 - 05 土層説明

- | | | | |
|---------|--|---------|---------------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 | 縮まり強く、粘性あり。白色粒子を均一に、細岩片・小礫を少量、焼土粒・炭化物粒を微量含む。 | 5 暗茶褐色土 | 縮まり・粘性あり。細岩片・白色粒子を均一に、1～3cm大の小礫を少量含む。 |
| 2 茶褐色土 | 縮まり・粘性あり。細岩片を均一に、白色粒子を少量、小礫を少量、褐色土をブロック状に混入する。 | 6 暗茶褐色土 | 縮まり・粘性あり。白色粒子・細岩片を少量、褐色土をブロック状に混入する。 |
| 3 暗茶褐色土 | 縮まりあり、粘性弱い。1～2cm大の小礫を均一に、細岩片を少量含む。 | 7 明黒褐色土 | 縮まり・粘性あり。細岩片を少量、炭化物粒子を微量含む。 |
| 4 暗茶褐色土 | 縮まり・粘性あり。白色粒子・細岩片を少量、炭化物を微量含む。 | 8 明黒褐色土 | 縮まり強く、粘性弱い。4～5cm大の礫を多量、白色粒子・細岩片を少量含む。 |

である。覆土は自然堆積の様相を呈し、暗茶褐色土を主体とする。柱穴はP1～P4の計4本が確認された。建物の四隅に配置される傾向が窺える。ただし、P1はかなり壁際に設けられている。柱穴の径は28～37cmを測り、床面からの深さは18～30cmを測る。P2とP3の間では炉と考えられる円形の土坑(P5)が確認された。P5は長軸77cm、短軸69cmを測り、深さは24cmを測る。また、P5の北東端部には45×28cmの範囲で焼土が確認された。

遺物：覆土中から縄紋土器20点(213g)、黒曜石製の石器剥片1点(2g)が出土しているが、細片のため図示できなかった。他の竪穴住居跡に比べて遺物の出土量は非常に少ない。縄紋土器は阿玉台式1点、勝坂式4点、時期不明15点が確認され、勝坂式が多い。勝坂式は1式を主体とする。

所属時期：出土遺物から縄紋時代中期中葉の阿玉台I b～II式期に所属すると考えられる。

(2) 土坑 (図15～17、表5)

土坑は20基が検出された。平面形状は円形基調のもの(SK-01～07・09～11・17～20)と長方形基調のもの(SK-08・12～16)がある。断面形状は一部弧状のもの(SK-02・20)があるが、他はすべて台形を呈する。2～3基がまとまって分布し、縄紋時代の竪穴住居跡周辺には円形の土坑が近接する傾向が窺える。また、長方形の土坑は長軸方位が南北の軸に近いもの(SK-13～16)が多い。遺物はSK-14・18で時期不明の土器の小片が出土した。また、SK-13とSK-14は重複し、SK-13が新しい。

表5 土坑計測表

土坑	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	長軸方位	位置
SK-01	1.30	1.19	18～20	—	A 4
SK-02	1.45	1.38	12～17	—	A 4
SK-03	1.22	1.12	17～20	—	B 4
SK-04	0.91	0.90	12～14	—	B 4
SK-05	1.20	0.61	37～40	—	D 5
SK-06	0.95	0.91	12～14	—	F 2
SK-07	0.91	0.95	16～20	—	G 2
SK-08	2.63	0.94	9～13	N-8°-W	G 2
SK-09	1.25	1.20	8～11	—	F 4
SK-10	1.89	1.80	16～20	—	D 4
SK-11	2.01	1.98	14～19	—	D 3
SK-12	1.90	1.38	18～20	N-19°-E	D 4
SK-13	2.81	0.74以上	12～14	N-4°-W	G 2
SK-14	2.92	0.94	9～11	N-8°-W	G 2
SK-15	1.83	1.14	16～19	N-2°-W	E 2
SK-16	2.46	0.76	13～18	N-0°-W	E 2
SK-17	1.23	1.11	15～20	N-63°-W	E 4
SK-18	1.78	1.46	28～32	N-66°-W	E 5
SK-19	1.30	1.19	17～19	—	A 3
SK-20	1.44	1.41	6～11	—	A 3

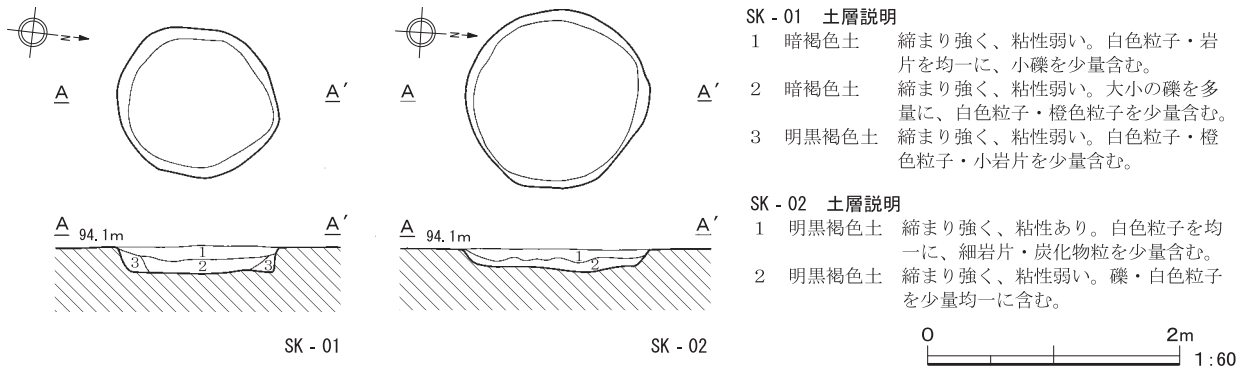
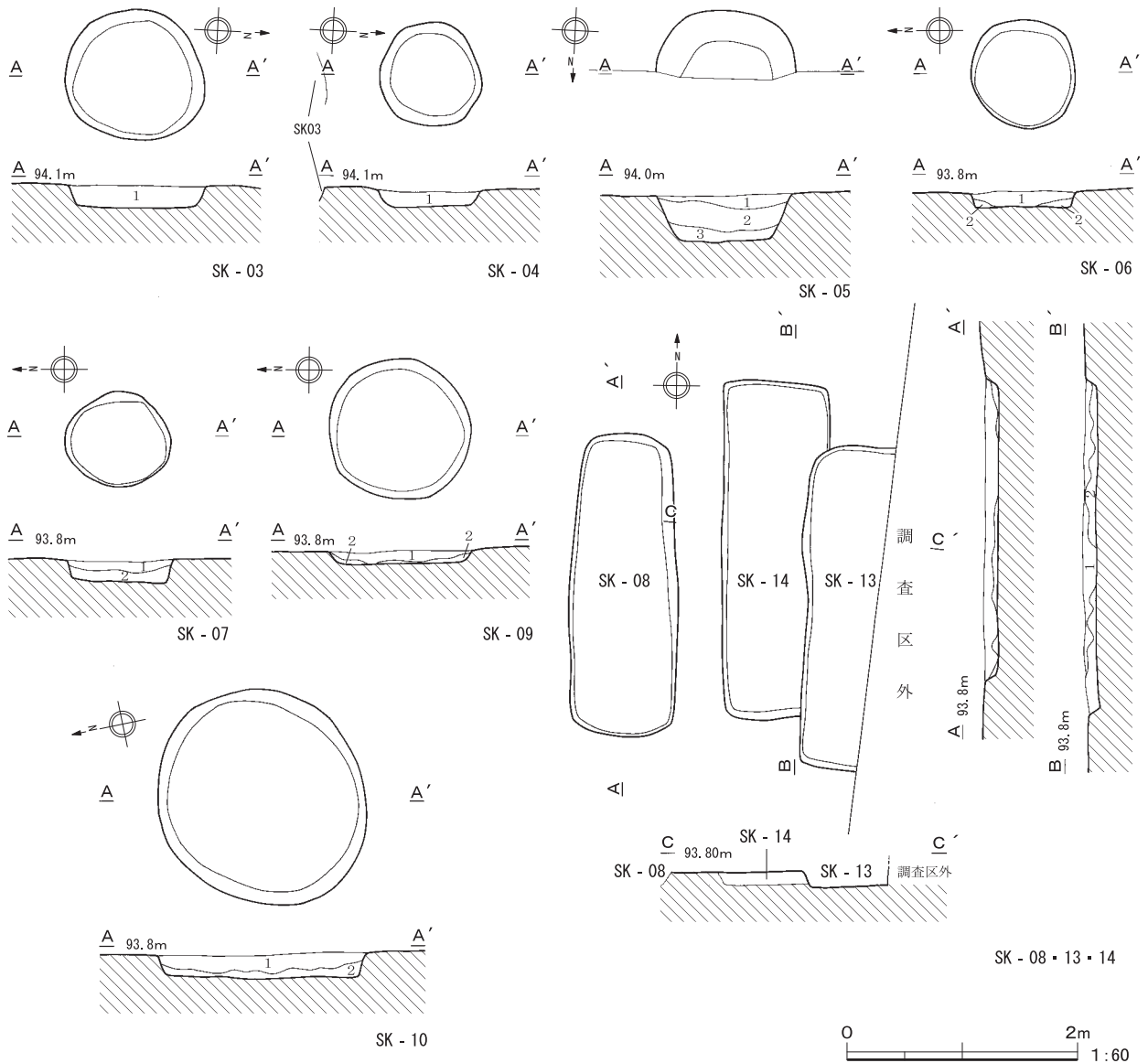


図15 SK - 01・02



SK - 03 土層説明

- 1 暗茶褐色土 締まり強く、粘性弱い。大小の礫・白色粒子を少量均一に含む。

SK - 04 土層説明

- 1 明黒褐色土 締まり強く、粘性なし。細岩片・小礫・白色粒子を均一に、橙色粒子を少量含む。

SK - 05 土層説明

- 1 明黒褐色土 締まり強く、粘性あり。白色粒子を均一に、細岩片・炭化物を少量含む。
- 2 明黒褐色土 締まり強く、粘性やや弱い。組成は1層に類似するが、礫を微量含む。
- 3 暗茶褐色土 締まり強く、粘性弱い。小礫・白色粒子を均一に、橙色粒子を少量含む。

SK - 06 土層説明

- 1 明黒褐色土 締まり強く、粘性弱い。白色粒子・砂粒を均一に、小礫を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 締まり強く、粘性あり。白色粒子・炭化物を微量含む。

SK - 07 土層説明

- 1 暗褐色土 締まり強く、粘性あり。白色粒子・細岩片を多量に小礫を少量含む。
- 2 明黒褐色土 締まり強く、粘性あり。白色粒子を均一に、小礫を微量含む。

SK - 08 土層説明

- 1 暗褐色土 締まり強く、粘性弱い。片岩粒を多量に、砂粒・小礫を均一に、炭化物を微量含む。
- 2 暗茶褐色土 締まり強く、粘性弱い。白色粒子・炭化物粒を少量均一に含む。
- 3 明黒褐色土 締まり強く、粘性弱い。白色粒子を微量含む。組成は2層に類似する。

SK - 09 土層説明

- 1 茶褐色土 締まり強く、粘性弱い。砂粒・片岩粒を均一に、炭化物粒・白色粒子を微量含む。
- 2 暗茶褐色土 締まり強く、粘性あり。白色粒子を均一に、炭化物粒・片岩粒を微量含む。

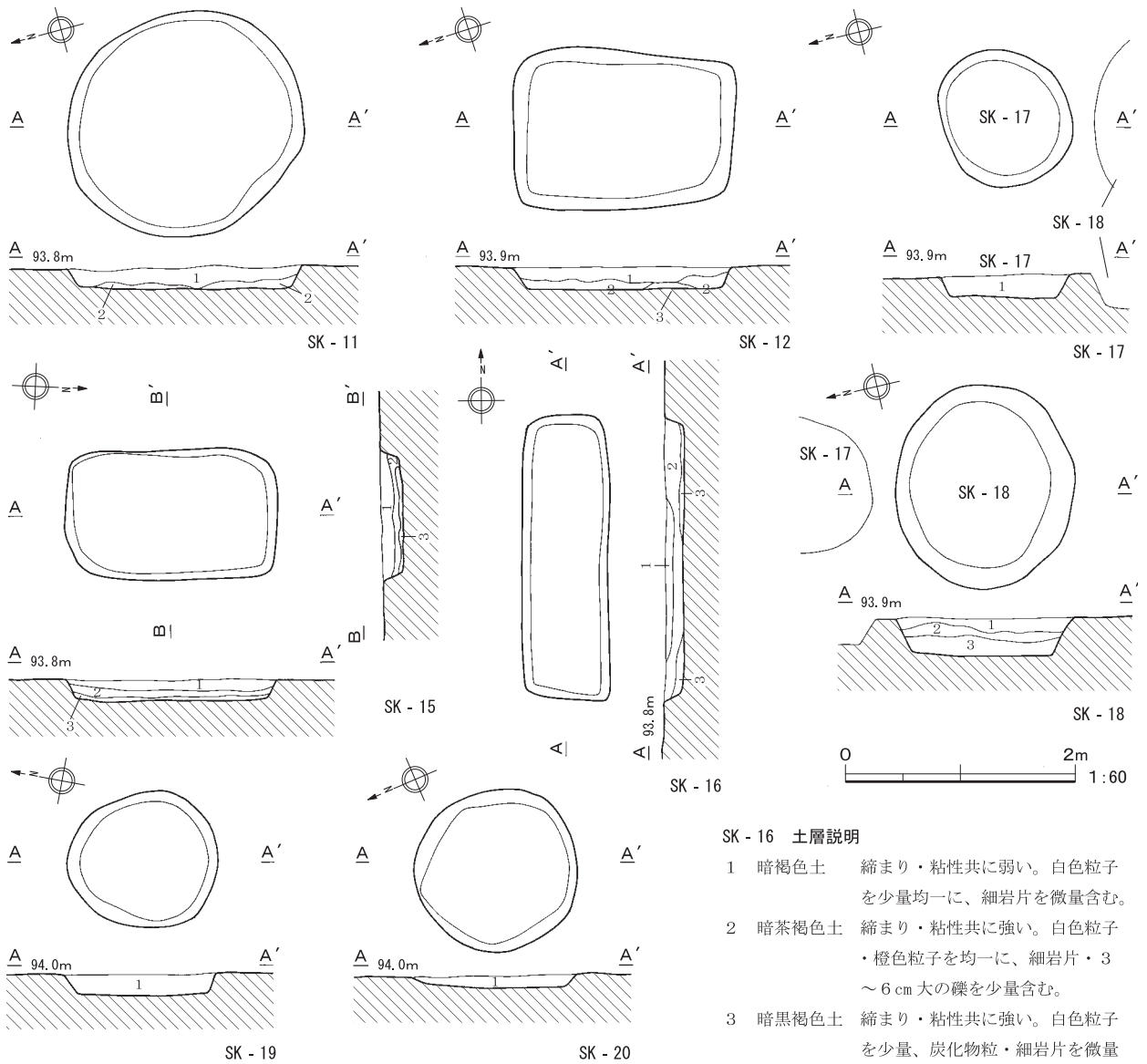
SK - 10 土層説明

- 1 暗褐色土 締まり強く、粘性あり。片岩粒・白色粒子を均一に、礫を微量に含む。
- 2 明黒褐色土 締まり強く、粘性あり。白色粒子を少量、炭化物粒・片岩粒を微量含む。

SK - 14 土層説明

- 1 淡黄茶褐色土 締まりやや強く、粘性弱い。0.3～1cm大の小礫を多量に含み、細土器片・1～2cm大のスコリアを少量含む。
- 2 暗黒褐色土 締まり強く、粘性強い。0.5～1cm大のスコリア・細土器片を微量に含む粘土層。

図 16 SK - 03 ～ 10 ・ 13 ・ 14



SK - 11 土層説明

- 1 暗茶褐色土 縮まり強く、粘性弱い。片岩粒・白色粒子を均一に、炭化物粒を微量含む。
- 2 明黒褐色土 縮まり強く、粘性弱い。白色粒子・炭化物粒を微量含む。

SK - 12 土層説明

- 1 暗褐色土 縮まり強く、粘性弱い。片岩粒・白色粒子を多量、炭化物粒・小礫を少量含む。
- 2 暗茶褐色土 縮まり強く粘性あり。白色粒子・片岩粒を少量、砂粒を微量含む。
- 3 暗茶褐色土 縮まり強く、粘性あり。砂粒・片岩粒・礫を均一に、炭化物粒を微量含む。

SK - 15 土層説明

- 1 暗茶褐色土 縮まりあり、粘性弱い。白色粒子・橙色粒子を均一に、細岩片を少量、1～3cm大の小礫を微量含む。
- 2 暗茶褐色土 縮まりあり、粘性やや強い。組成は1層に類似するが、小礫を含まない。
- 3 暗黒褐色土 縮まり強く、粘性あり。白色粒子・細岩片を微量含む。

SK - 17 土層説明

- 1 明茶褐色土 縮まり・粘性共に強い。0.2～0.5cmの小礫を少量含み、黒褐色ブロックを多量に、黄土色ブロックを微量含む。

SK - 18 土層説明

- 1 灰褐色土 縮まり強く、粘性弱い。0.2～1cm大の小礫を多量に含む。
- 2 明茶褐色土 縮まり・粘性共に強い。0.2～0.5cm大の砂礫・1～2cm大の小礫を少量含み、1cm程度の土器片を微量含む。黒褐色土のブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 縮まり・粘性共に強い。0.5～1cm大のスコリアを少量含む。

SK - 19 土層説明

- 1 明黒褐色土 縮まりあり、粘性なし。白色粒子・細岩片を均一に、2～4cm大の小礫を少量含む。

SK - 20 土層説明

- 1 黒褐色土 縮まりあり、粘性なし。砂粒・細岩片を多量に、2～6cm大の礫を少量含む。

図 17 SK - 11・12・15～20

(3) ピット (図 18、表 6)

ピットは3基が検出された。調査区内に散在して分布し、規則的な配列は認められない。平面形状は円形 (P-01)、楕円形 (P-02・03) が確認された。底面は平坦なものが多く、深さは17～33cmと浅いものが多い。いずれのピットからも遺物は出土していないため、詳細な所属時期は不明である。ただし、縄文時代の遺物を包含するV層を掘り込むことから、それ以降の時期に所属すると考えられる。

表 6 ピット計測表

ピット	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	位置
P-01	0.58	0.29以上	30～33	B 5
P-02	0.68以上	0.82	29～36	B 6
P-03	0.80	0.58	17～20	G 1

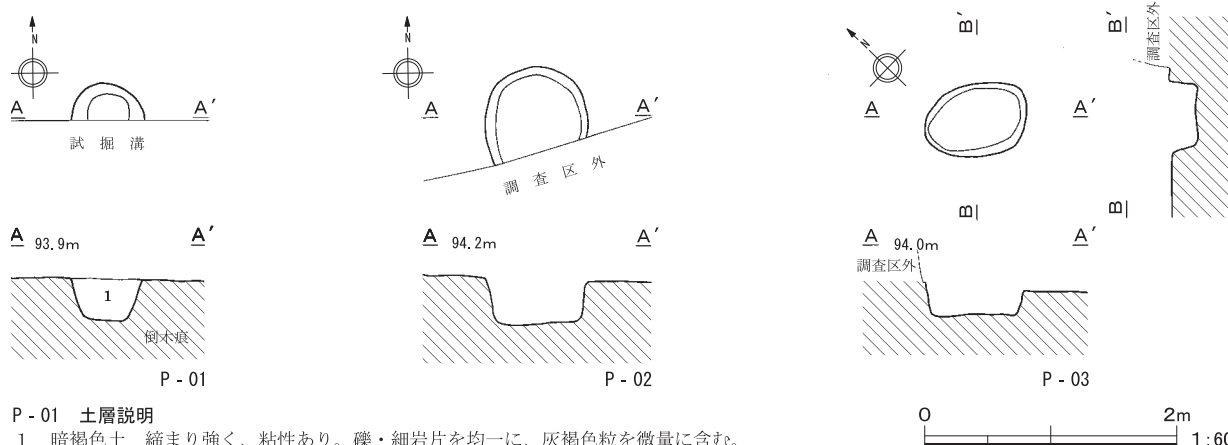


図 18 P-01～03

(4) 遺物包含層 (図 19・20、表 7～11 / 写真図版 2・3)

遺物包含層はIV層とV層の2面が確認された。IV層は縄文時代中期の遺物を多量に包含し、調査区全体に堆積する。層厚は15～20cmを測る。遺物の密度は調査区の北西部で最も高く、東へ行くにつれて希薄になるようである。V層も調査区全体に堆積し、少量の縄文土器を包含するが、掘削を行っていないため詳細な時期や遺物の全体量は不明である。したがって、掲載した遺物は縄文時代前期前葉～中葉の土器(1)を除いてすべてIV層から出土したものである。IV層から出土した縄文時代の遺物は縄文土器45,405g、土製品50g、石器2,366g、自然礫2,890g、焼土塊3,020gである。

時期が判別できた縄文土器は阿玉台式481点、勝坂式616点、加曽利E式84点が確認され、その大半は中期中葉の阿玉台式・勝坂式で構成される。阿玉台式はIb式(2～6)とII式(7～11)があり、II式がやや多い。器形は深鉢形がほとんどであるが、浅鉢形も少量認められる。勝坂式は1～3式がある。1式(12～19・25)が最も多く、2式ないし3式に所属するもの(20～24)が次いで多い。細片のため図示していないが、1式の中には古段階に相当するもの(貉沢式)が約1割認められた。また、2・3式の中には焼町式(26・27)が約35%認められた。器形はすべて深鉢形である。中期中葉では加曽利E式が時期の判別可能な縄文土器の約2割を占める。EⅠ式(28)が極微量認められるものの、9割以上はEⅢ式(29・30)に該当する。器形は深鉢形と浅鉢形がある。

土製品は円盤2点が確認され、1点(31)は胎土に多量の雲母を含んでいる。時期はいずれも中期中葉に所属すると考えられる。

石器は打製石斧7点、磨製石斧2点、スクレイパー4点、棒状礫2点、剥片10点が確認された。石器の組成比率は打製石斧が最も高く、包含層出土石器全体の約3割を占める。石材は黒曜石・安山岩・頁岩・砂岩・ホルンフェルス・緑色岩類・片岩・石英・凝灰岩が認められ、頁岩が最も多い。

その他、古代以降の遺物として土師器9点、須恵器3点、瓦1点、陶器1点、土製品2点が出土している。

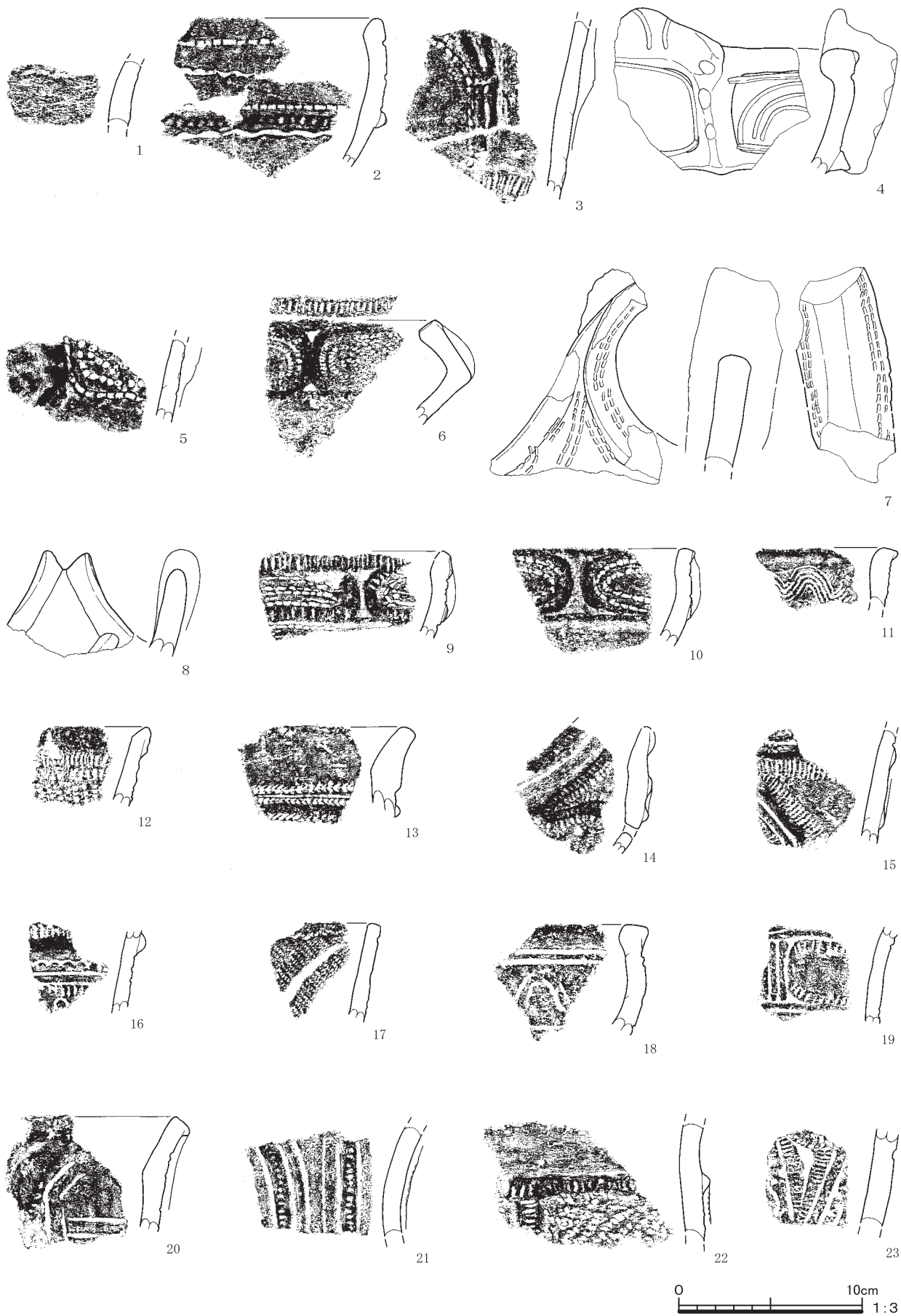


图 19 遺物包含層・遺構外出土遺物 (1)

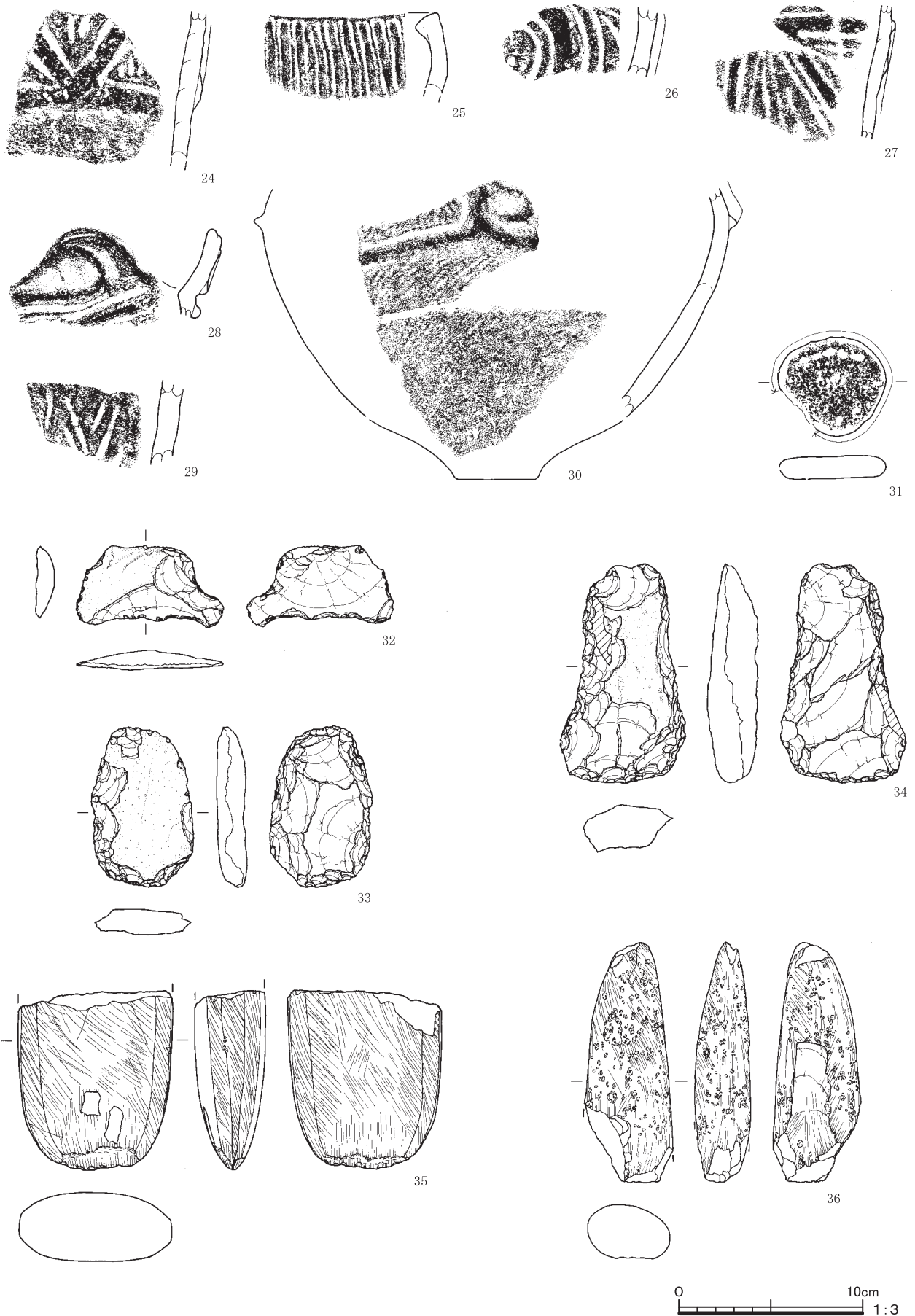


图 20 遺物包含層・遺構外出土遺物 (2)

表7 遺物包含層出土土器組成表（点数・重量）

中 期						合 計
阿玉台 I b	阿玉台 II	勝坂 1	勝坂 2・3	焼町	加曾利 E	
61 (1,601g)	96 (2,624g)	365 (4,740g)	45 (1,434g)	45 (779g)	120 (2,666g)	733 (13,872g)
11.6%	19.0%	34.2%	10.3%	5.6%	19.3%	100%

※比率は時期の判別できたものの中で重量を用いて算出した。

表8 遺物包含層出土土器組成表（点数）

	黒曜石	安山岩	頁岩	砂岩	ホルンフェルス	緑色岩類	片岩	石英	凝灰岩	合計
打製石斧		1	2	1	1		2			7
磨製石斧						2				2
スクレイパー			4							4
棒状礫							2			2
剥片	1		5		2			1	1	10
合計	1	1	11	1	3	2	4	1	1	25

表9 遺物包含層出土土器組成表（重量：g）

	黒曜石	安山岩	頁岩	砂岩	ホルンフェルス	緑色岩類	片岩	石英	凝灰岩	合計
打製石斧		88	278	234	129		314			1,043
磨製石斧						787				787
スクレイパー			158							158
棒状礫							210			210
剥片	4		137		13			2	12	168
合計	4	88	573	234	142	787	524	2	12	2,366

表10 遺物包含層・遺構外出土遺物観察表（1）

No.	器 種	特 徴・計測値（cm・g）	①胎土 ②色調	備 考
1	縄紋土器 深 鉢	縄紋カ。器面荒れが著しい。内面はナデ。	①片岩・繊維 ②明褐色	SI - 03 に混入 前期前葉～中葉
2	縄紋土器 深 鉢	平口縁。突帯・隆帯で棒状区画→隆帯上に角棒状工具によるキザミ。区画脇に単列の角押紋、区画脇・内に単沈線による波状紋。内面は横位のナデ。	①多量の石英・雲母 ②褐色	阿玉台 I b 式
3	縄紋土器 深 鉢	突起状の垂下隆帯→隆帯脇に単列の角押紋→横位連続爪形文。内面は斜位のナデ。	①多量の雲母 ②褐色	阿玉台 I b 式
4	縄紋土器 深 鉢	平口縁。帯状突起。突帯・隆帯で棒状区画→区画脇に単沈線。突起・区画内に同様の沈線による弧状文。内面は横位のナデ。	①片岩 ②橙色	阿玉台 I b 式
5	縄紋土器 深 鉢	隆帯・単列の角押紋で区画→区画内に竹管による刺突。内面は横位のナデ。	①多量の石英・雲母 ②黒褐色	阿玉台 I b 式
6	縄紋土器 浅 鉢	平口縁。隆帯・屈曲部で楕円状区画→隆帯脇に竹管による単・複列の角押紋→区画内に同様の角押紋による渦巻紋等。口唇部にヘラ状工具によるキザミ。内面は横位のナデ・ミガキ。	①多量の石英・雲母 ②明赤褐色	阿玉台 I b・II 式
7	縄紋土器 深 鉢	波状口縁。角棒状工具によるキザミを有する帯状突起。突起・突帯脇等に半截竹管状工具による複列の角押紋。内面はナデ。	①多量の石英・雲母 ②黄褐色	阿玉台 II 式
8	縄紋土器 深 鉢	波状口縁。帯状突起。隆帯。内面は縦位のナデ。	①多量の雲母 ②橙色	阿玉台 II 式
9	縄紋土器 深 鉢	平口縁。隆帯で横位・楕円状区画→区画脇に半截竹管状工具による複列の角押紋。内面は横位のナデ。	①多量の雲母 ②橙色	阿玉台 II 式
10	縄紋土器 深 鉢	平口縁。突帯・隆帯で横位・楕円状区画→区画脇に半截竹管状工具による複列の角押紋。突帯・隆帯上にヘラ状工具によるキザミ。内面は横位のナデ。	①多量の雲母 ②褐色	阿玉台 II 式
11	縄紋土器 深 鉢	櫛歯状工具による横位波状紋。内面は横位の粗いナデ。	①赤色片岩 ②暗赤褐色	阿玉台 II 式
12	縄紋土器 深 鉢	平口縁。幅広角押紋で横位区画→区画内に密接する縦位の角押紋。口唇下に三叉紋。内面はナデ。	①多量の片岩 ②橙色	勝坂 1 式
13	縄紋土器 深 鉢	平口縁。隆帯で横位区画→区画脇に三角押紋。内面は横位のナデ。	①多量の赤色片岩 ②橙色	勝坂 1 式
14	縄紋土器 深 鉢	波状口縁。隆帯で三角形区画→突帯・隆帯上・脇に幅広角押紋→区画内に三叉紋・三角押紋。内面はナデ。補修孔。	①雲母 ②橙色	勝坂 1 式

表 11 遺物包含層・遺構外出土遺物観察表（2）

No.	器種	特徴・計測値（cm・g）	①胎土 ②色調	備考
15	縄紋土器 深鉢	隆帯で三角形区画→隆帯脇に爪形紋・半截竹管状工具による沈線。内面は斜位のナデ。	①多量の片岩 ②明赤色	勝坂1式
16	縄紋土器 深鉢	隆帯で区画→隆帯脇に半截竹管状工具による沈線・刺突・爪形紋。区画内に竹管による刺突。内面は斜位のナデ。	①片岩 ②赤褐色	勝坂1式
17	縄紋土器 深鉢	平口縁。RLの単節縄紋→鋸歯状の三角押紋、凹線。内面は丁寧なナデ。	①雲母 ②暗褐色	勝坂1式
18	縄紋土器 深鉢	半截竹管状工具による沈線で横位区画→区画内に同様の沈線による波状紋。内面は横位のナデ。	①多量の片岩 ②橙色	勝坂1式
19	縄紋土器 深鉢	半截竹管状工具による内皮痕の残る沈線で杵状区画→印刻で区画を楕円状に整形→区画脇に截痕。内面はナデ。	①雲母・角閃石 ②暗褐色	勝坂1式
20	縄紋土器 深鉢	平口縁。扁平な隆帯で区画→区画脇に半截竹管状工具による沈線→区画内に同様の横位沈線。内面は横位のナデ。	①角閃石 ②橙色	勝坂2・3式
21	縄紋土器 深鉢	縦位隆帯→隆帯上に角棒状工具によるキザミ。隆帯脇に半截竹管状工具による内皮痕が残る沈線。内面はナデ。	①多量の石英・雲母、角閃石 ②明赤褐	勝坂2・3式
22	縄紋土器 深鉢	隆帯で横位・縦位区画→隆帯上にへら状工具によるキザミ、区画内にRLの単節縄紋。内面は横位・斜位のナデ。	①赤色片岩・角閃石 ②橙色	勝坂2・3式
23	縄紋土器 深鉢	三角形区画沿いに数条の沈線→沈線間に交互刺突による複合鋸歯紋。区画内に三叉紋→空白部にへら状工具によるキザミ。内面はナデ。	①多量の片岩 ②暗褐色	勝坂2・3式
24	縄紋土器 深鉢	隆帯で横位・三角形区画→隆帯上にRLの単節縄紋。区画脇に単沈線→区画内に同様の工具による短沈線。内面は斜位の丁寧なナデ。	①赤色片岩・角閃石 ②橙色	勝坂2・3式
25	縄紋土器 深鉢	半截竹管状工具による内皮痕が残る密接縦位沈線。内面は横位のナデ。	①多量の片岩 ②橙色	勝坂式
26	縄紋土器 深鉢	弧状隆帯→隆帯脇に半截竹管状工具による内皮痕の残る沈線→空白部に玉抱き三叉紋カ。内面はナデ。	①角閃石 ②明赤褐色	焼町式
27	縄紋土器 深鉢	横・縦位隆帯→隆帯沿に数条の短沈線→空白部に三叉紋。内面はナデ。	①角閃石 ②明赤褐色	焼町式
28	縄紋土器 深鉢	山形突起。隆帯。内面はナデ。	①— ②暗褐色	加曾利E I式
29	縄紋土器 深鉢	縦位矢羽状の単沈線。内面はナデ。	①雲母・角閃石 ②灰黄褐	加曾利E III式
30	縄紋土器 浅鉢	口縁部を隆帯で渦巻状・杵状区画→杵状区画内・体部にRLの単節縄紋→隆帯脇を調整。内面は斜位の丁寧なナデ。	①多量の白色粒、角閃石 ②黄橙色	加曾利E III式
31	土製品 土製円盤	角押紋。裏面はナデ。側面に磨痕。一部欠損。長径：3.8cm・短径：3.6cm・厚さ：0.8cm・重さ：12.2g。	①多量の雲母 ②暗褐色	阿玉台式
32	石器 スクレイパー	縁辺部に調整剥離痕・微細剥離痕、その周辺に磨耗痕。素材：礫皮を持つ薄い横長剥片。石材：頁岩。長さ：4.4cm・幅：7.9cm・厚さ：1.1cm・重さ：30.7g。	—	
33	石器 打製石斧	小撥形。周辺部に剥離調整痕。素材：礫皮を持つ剥片。石材：砂岩。長さ：8.7cm・幅：5.6cm・厚さ：1.7cm・重さ：101.8g。	—	
34	石器 打製石斧	撥形。側縁に垂直打撃による剥離調整痕。摂理による部分的な平坦剥離。刃部周辺に僅かな磨耗痕。素材：礫皮を持つ剥片。石材：砂岩。長さ：11.9cm・幅：6.8cm・厚さ：2.8cm・重さ：234.6g。	—	
35	石器 磨製石斧	乳棒型。両側縁部に稜。中央～刃部にかけて著しい研磨痕。刃部周辺に刃こぼれ・研磨痕。上半部欠損。石材：緑色岩類。長さ：(9.7)cm・幅：(8.8)cm・厚さ：(3.9)cm・重さ：519.4g	—	
36	石器 磨製石斧	乳棒型。全体に研磨痕。調整時の敲打痕が残存。刃部・基部の端部欠損。石材：緑色岩類。長さ：(13.1)cm・幅：(4.8)cm・厚さ：3.0cm・重さ：267.0g。	—	

V まとめ

今回の調査では竪穴住居跡5軒、土坑20基、ピット3基、遺物包含層2面が検出された。特に検出例の少ない縄紋時代中期中葉の竪穴住居跡が4軒が確認され、本庄市域での貴重な調査成果が得られた。また、当該期の遺跡としてはやや特異な占地を呈することから、本章では遺跡周辺の縄紋時代集落との比較を行ない、本遺跡の占地傾向を読み取ることでまとめとしたい。

児玉大天白遺跡における集落の継続期間

検出された竪穴住居跡の所属時期は阿玉台Ⅰb式期1軒(SI-02)、Ⅰb～Ⅱ式期2軒(SI-03・05)、Ⅱ式期1軒(SI-04)である。したがって、集落の継続期間は阿玉台Ⅰb式～Ⅱ式期の比較的短期間に営まれた集落と考えられる。また、遺物包含層から出土した縄紋土器の時期も勘察すると勝坂式後半期、および加曾利EⅢ式期には一定量の土器が存在することから、断続的な土地利用の痕跡が窺える。さらに、加曾利EⅢ式以降の時期の土器は確認されていないことから、本時期をもって児玉大天白遺跡における土地利用の痕跡は途絶する。

縄紋中期集落の占地傾向と動向(図21)

本庄市域における縄紋時代中期の集落には次のような占地傾向、および動向が指摘されている(鈴木1997・2006)。中期前半の集落は調査例が少ないが、概ね前期以来の占地を踏襲し、上武山地の縁辺や児玉丘陵などの高所に集落を構える傾向が強い。上武山地では本庄市塔ノ入遺跡(鈴木他2007)、山間の河岸段丘上には神川町林遺跡(高橋他2007)などが占地し、児玉丘陵上では美里町広木上之宿遺跡(上田1997)、峯遺跡(篠崎他1983)、川向遺跡(中沢他1999)などで阿玉台Ⅰb式～勝坂式後半期の集落が営まれる。これらは大半が住居1～2軒で構成される小規模な集落である。また、集落の継続期間も短く、勝坂式終末期には集落が途絶えることも共通する。このように、中期前半においては小規模な集落が特定の地形区分へ偏在して占地する傾向が認められる。

中期後半になると遺跡数は増加し、台地面へ集落の進出が開始される。本庄台地面に占地する将監塚遺跡(石塚他1987)や古井戸遺跡(宮井他1989)、新宮遺跡(恋河内1996)といった大規模な環状集落は時期別に見ると勝坂式終末期から造営が開始され、加曾利EⅡ式期にはピークを迎える。さらに加曾利EⅢ式期には集落の解体・分散傾向が窺え、加曾利EⅣ式期には急速に衰退へ向かう。一方、山地や丘陵上でも勝坂式終末期から集落が形成される。山地部では本庄市橋ノ入遺跡(鈴木他1986)、丘陵上では宮内上ノ原遺跡A地点、大久保山遺跡(昆2001)などがあるが、これらの遺跡は本庄台地面に占地する遺跡と比較すると、住居数軒からなる小規模な集落である。また、大規模集落の解体が始まる加曾利EⅢ式期には、低地部の微高地上に占地する小規模な集落の造営が開始される。こうした集落の動向は分散居住の結果と捉えられる。特に将監塚・古井戸・新宮遺跡から近距離に位置する中下田遺跡(鈴木1991)や西富田前田遺跡(増田1989)、七色塚遺跡(恋河内2008)はいずれも低地部の微高地上に占地し、東ないし北東方向への集落の分散とみられる分布のあり方を示している。丘陵部でも塩谷平氏ノ宮遺跡(恋河内他2006)や宮内上ノ原遺跡A地点などで加曾利EⅢ式期の小規模な集落を確認でき、大規模集落が台地面に集中する一方で小規模集落は特定の地形に偏らない分布状況を呈している。

このように、中期前半では山地・丘陵部へ集落の占地が偏るが、中期後半においては遺跡の分布は比較的散漫な状態を示し、集落の規模による占地の偏りこそあるものの、地形区分においては比較的等質な占地傾向をもつことが指摘されている。

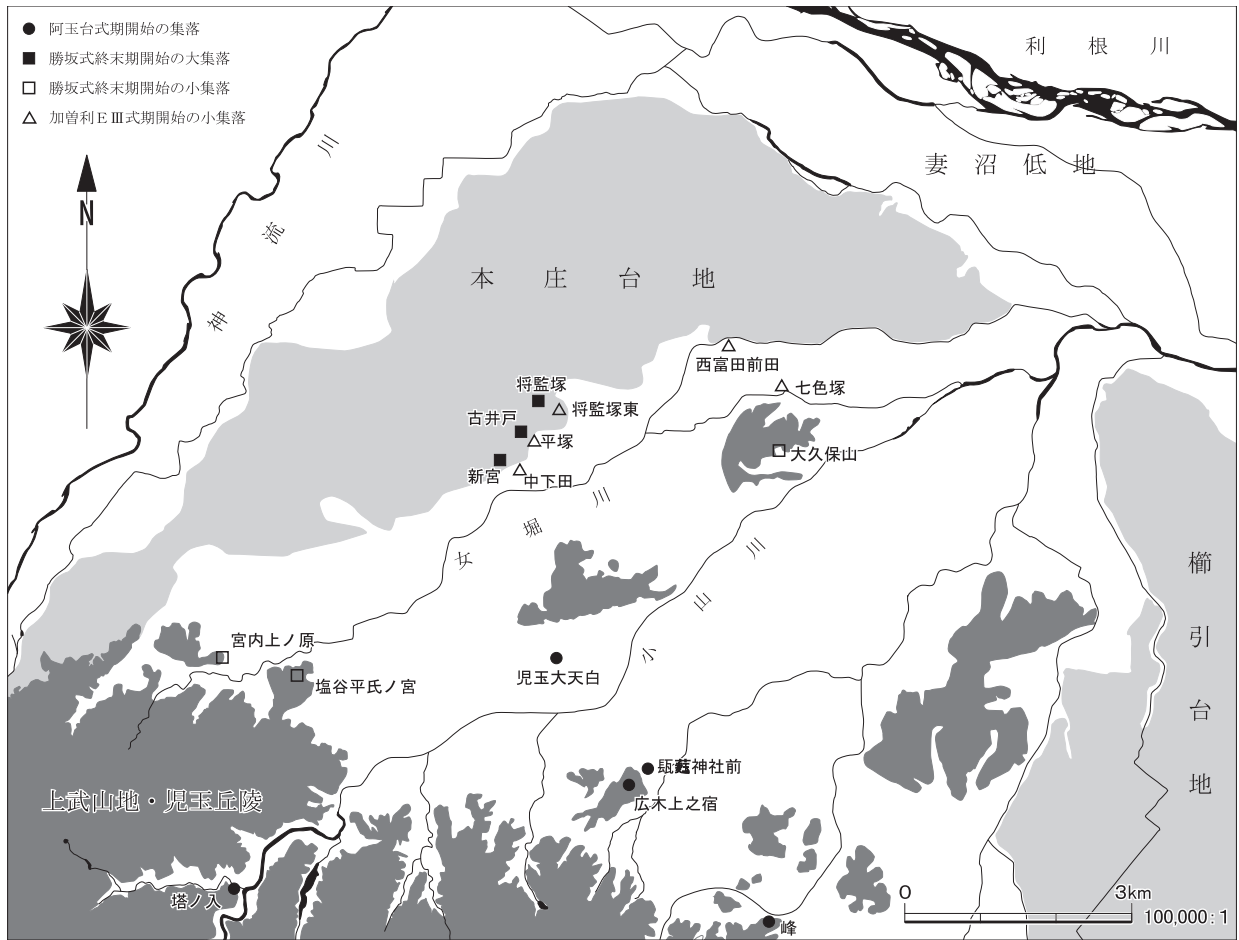


図 21 縄紋時代中期の主要遺跡

児玉大天白遺跡の位置付け

以上のような傾向を踏まえ、中期前半の遺跡と比較すると、本遺跡は北側に生野山丘陵を控えた低地部の微高地上に占地しており、この時期にあつては特異な様相を呈する。同時期の類例としては阿玉台Ⅱ式期の住居跡 1 軒が確認された美里町舘薺神社前遺跡（中村他 1980）があり、遺跡は南側に丘陵を控えた低地部の微高地上に占地していることから本遺跡と近い占地と言える。一方、中期後半の遺跡と比較すると、加曾利 EⅢ式期の集落には低地部の微高地上に占地するもの（上記の中下田遺跡、西富田前田遺跡、七色塚遺跡など）があり、本遺跡の占地傾向はそれらの遺跡に類似することは注意される。

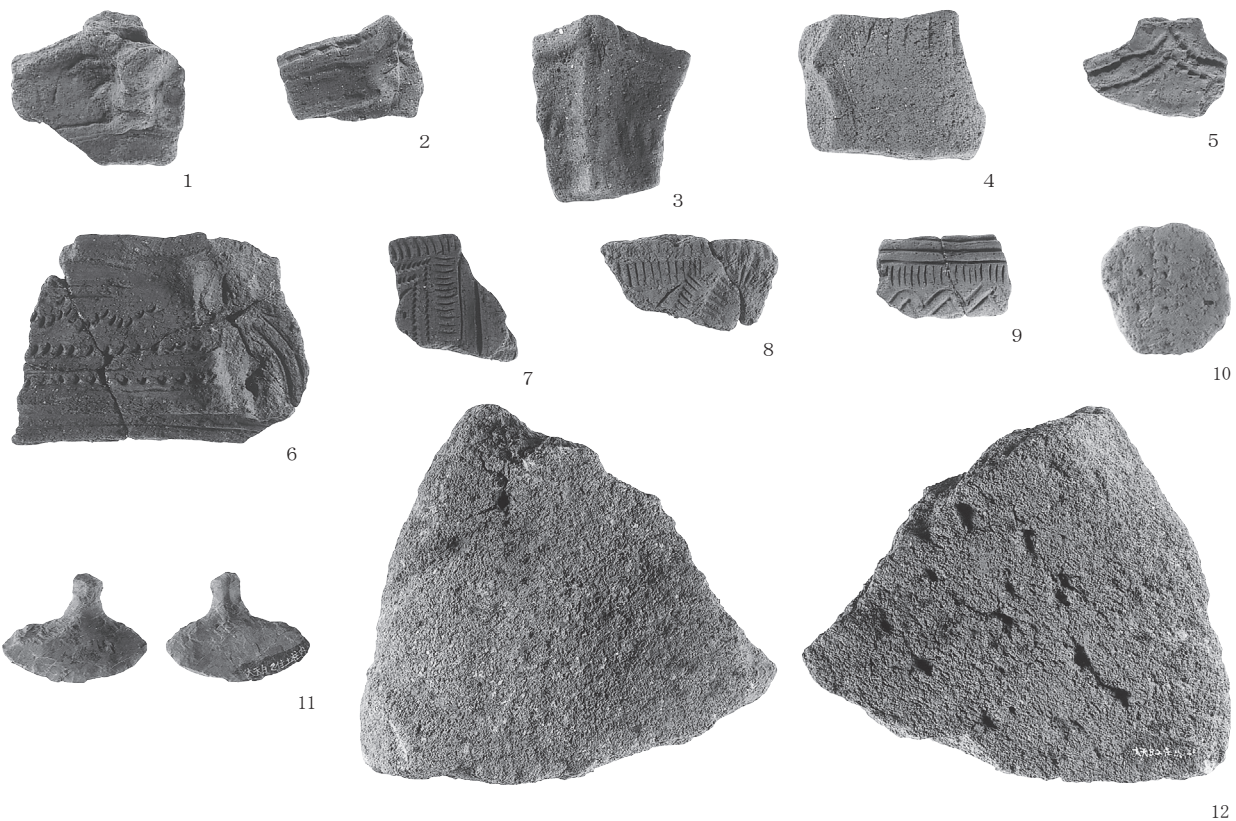
先述のように中期後半における大規模集落は台地部に集中する一方で、小規模な集落は比較的地形区分に偏りのない占地傾向を示す。この点から、中期前半においても山地・丘陵部へ占地する傾向が強いものの、少数ではあるが低地部へ進出した集落が存在したと推察される。したがって、本遺跡や舘薺神社前遺跡はそのような集落に該当するものと考えられる。また、本遺跡における集落の終焉は勝坂式前半期であり、本庄台地面の大規模集落が形成される時期とは直接的な接点をもたないが、遺物包含層出土土器の組成（Ⅳ - 3 - (4) : p. 21 参照）から勝坂式後半期、および加曾利 EⅢ式期に断続的な土地利用の痕跡を認めることができ、大規模集落の形成される時期、そして解体が始まる時期にそれぞれ符合する。このように本庄台地面やその縁辺の集落の動向と相互に関連し合う状況がみられることも本遺跡の占地傾向と関連していよう。

以上から、本遺跡は縄紋時代中期前半の集落でありながら、前期以来の占地傾向から脱却し、いち早く中期後半的な占地特性を備えた先駆的な集落と位置づけることができる。

引用・参考文献

- 石塚久則他(1986)『将監塚－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第63集
- 上田真由美(1997)『広木上之宿遺跡－縄文時代編－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第185集
- 恋河内昭彦(1990)『下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集
- 恋河内昭彦(1995)『南共和・新宮遺跡』児玉町調査会報告第6・7集
- 恋河内昭彦(1996)『辻堂Ⅱ・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第20集
- 恋河内昭彦(2000)『天田遺跡－B地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第11集
- 恋河内昭彦(2001)『女池遺跡－B・D地点の調査－』児玉町文化財調査報告書第35集
- 恋河内昭彦(2003)『大久保遺跡－B地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第14集
- 恋河内昭彦(2004)『女池遺跡－A地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第16集
- 恋河内昭彦(2006)『金屋下別所遺跡B地点・塩谷平氏ノ宮遺跡・塩谷下大塚遺跡E地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 恋河内昭彦(2008)『七色塚遺跡Ⅱ－B1地点－・北堀新田前遺跡－A1地点－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集
- 昆 彰生(2001)『大久保山Ⅸ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告9
- 櫻井 和哉(2004)『児玉大久保遺跡－C地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第17集
- 篠崎 潔他(1983)『白欠・柳町・森浦・向田・向・東宮平・峯・栗山』美里村遺跡発掘調査報告書第1集
- 鈴木敏昭他(1978)『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡調査報告書 第16集
- 鈴木徳雄他(1986)『橋ノ入遺跡Ⅱ』児玉町文化財調査報告書第6集
- 鈴木徳雄他(1991)『辻ノ内・中下田・塚畠・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告第15集
- 鈴木徳雄他(1997)『将監塚東・平塚・藤塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第26集
- 鈴木徳雄他(1998)『児玉条里遺跡－児玉北部地区－』児玉町文化財調査報告書第28集
- 鈴木徳雄他(2005)『脊戸谷遺跡－宮内古墳群の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第19集
- 鈴木徳雄他(2006)『宮内上ノ原Ⅱ遺跡』本庄市遺跡調査会報告第20集
- 鈴木徳雄他(2007)『児玉清水遺跡－A地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告第18集
- 鈴木徳雄他(2007)『児玉清水遺跡Ⅱ－B地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告第19集
- 瀬田 哲夫(2010)『児玉大久保遺跡－A地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告第30集
- 高橋清文他(2007)『林遺跡発掘調査報告書』神泉村遺跡調査会文化財調査報告書第3集
- 中沢良一他(1999)『鍛冶屋峯遺跡・川向遺跡・森後遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第10集
- 中東 耕志(1993)「本庄市宥勝寺北裏遺跡の爪形紋土器」『利根川』14
- 中村倉司他(1980)『瓶蓋神社前遺跡・一本松古墳』埼玉県遺跡調査会報告書第38集
- 増田 一裕(1989)『四方田・後張遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 松澤 浩一(2005)『宮内上ノ原遺跡－B地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第18集
- 松澤 浩一(2005)「河内下ノ平遺跡の発掘調査」『児玉郡市文化財担当者会報』第5号 児玉郡市文化財担当者会
- 松本 完他(2009)『浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・A2地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 宮井英一他(1989)『古井戸－縄文時代－』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第75集
- 宮田 忠洋(2008)『宮内上ノ原遺跡Ⅲ－E地点の調査－』本庄市埋蔵文化財調査報告書第10集

写 真 图 版



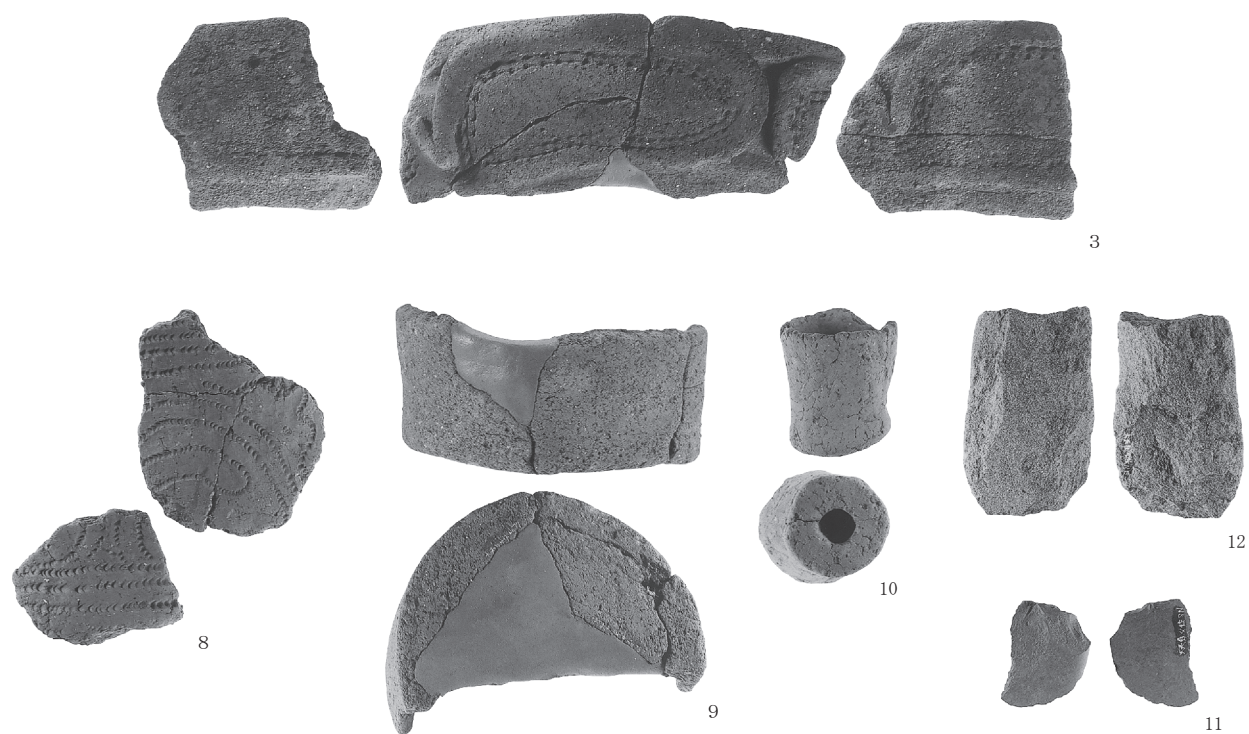
SI - 02 出土遺物



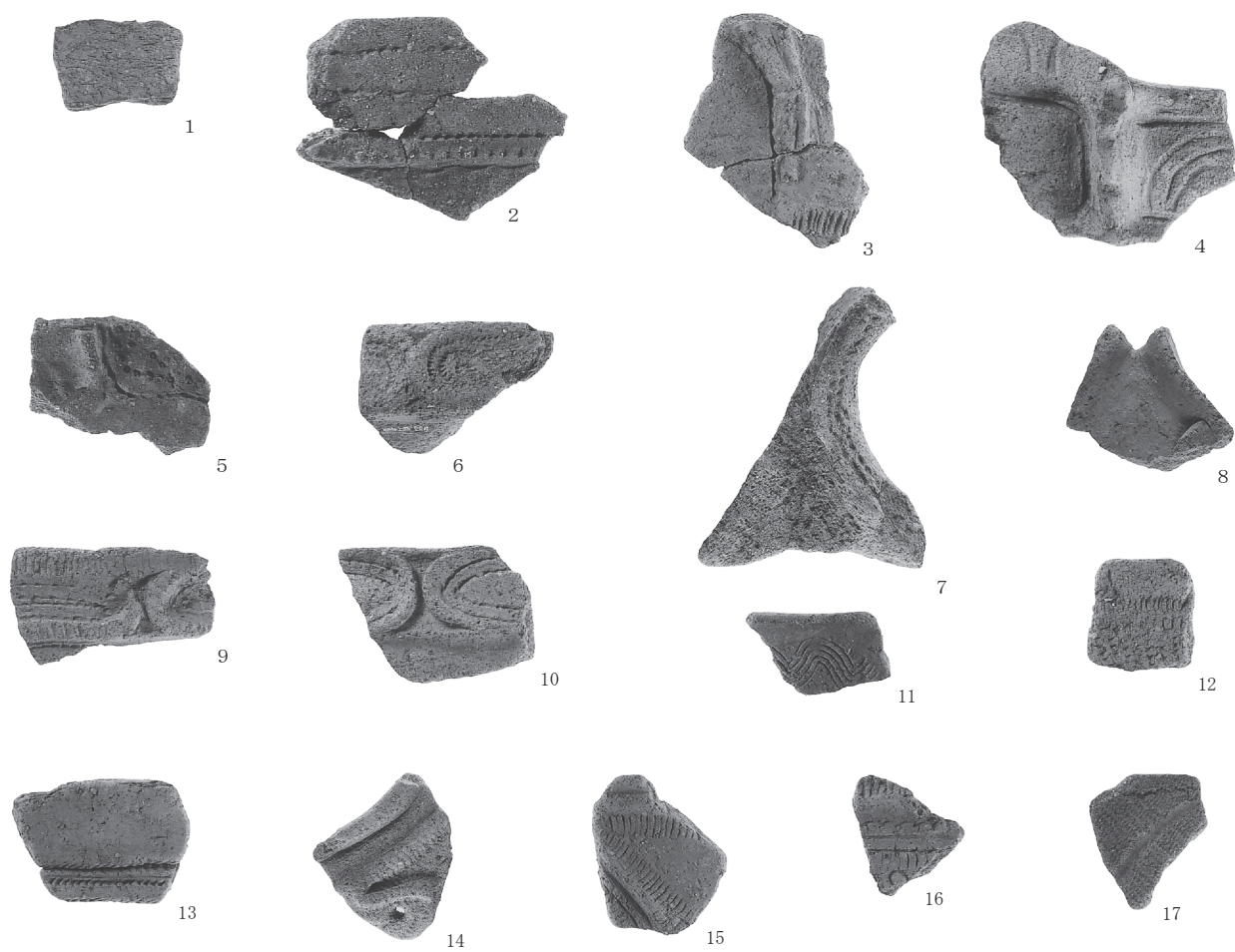
SI - 03 出土遺物

SI - 04 出土遺物 (1)

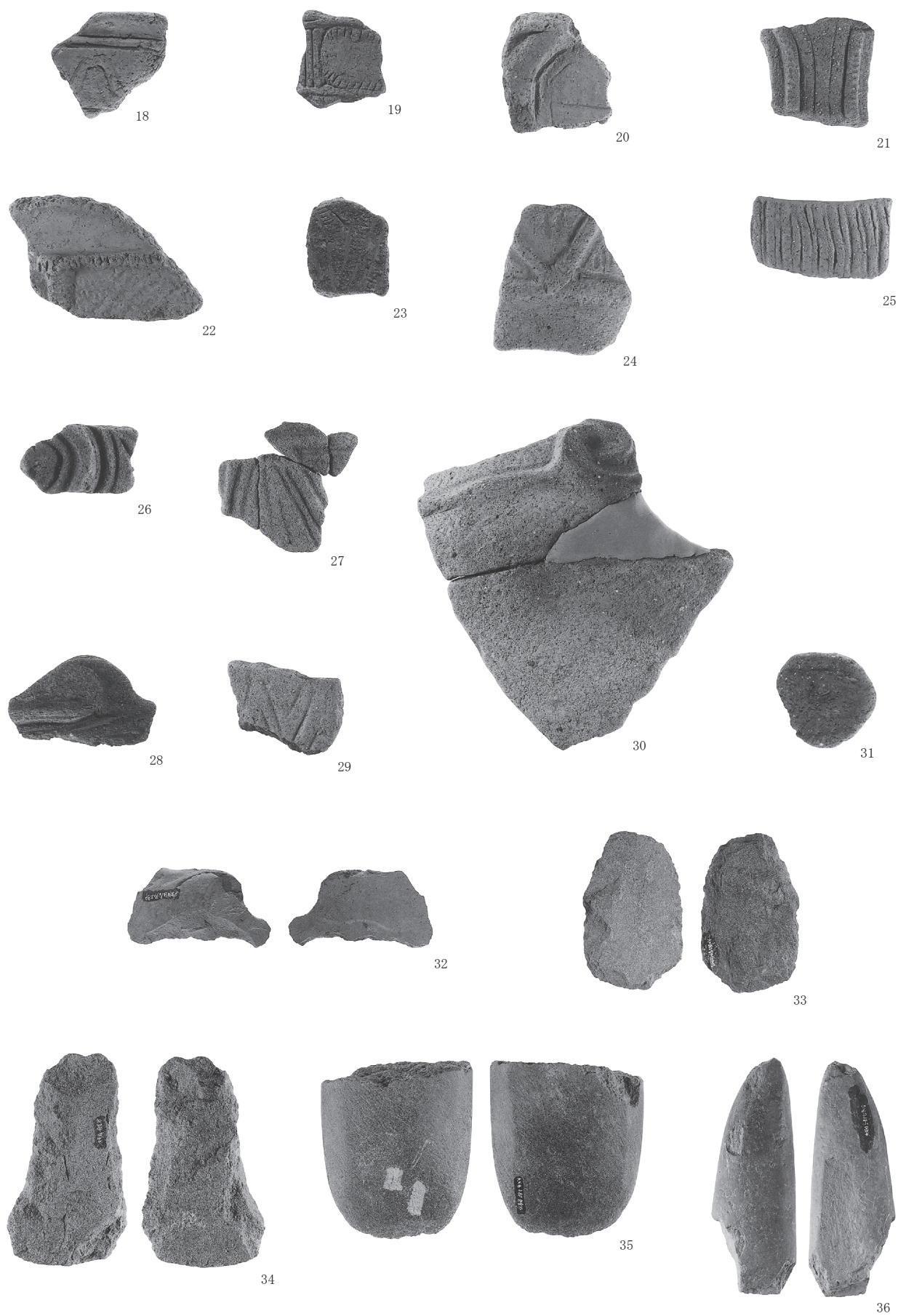
写真図版 2



SI - 04 出土遺物 (2)



遺物包含層・遺構外出土遺物 (1)



遺物包含層・遺構外出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	こだまだいてんぱくいせき							
書名	児玉大天白遺跡							
副書名	工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第34集							
編著者名	浅間 陽							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 TEL 0495-25-1185							
発行年月日	西暦2010(平成22)年10月29日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こだまだいてんぱく 児玉大天白 遺跡	さいたまけんほんじょうし 埼玉県本庄市 こだまちょうこだま 児玉町児玉 ばん 1724番8	54	307	36° 11' 19"	139° 8' 37"	19951122 ～ 19960228	690 m ²	工場建設に伴う緊急発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
児玉大天白遺跡	集落	縄紋時代		竪穴住居跡 5軒 土坑 20基 ピット 3基 遺物包含層 2面		縄紋土器 土製品 石器		縄紋時代中期中葉(阿玉台I b式～II式期)の集落を確認。

本庄市遺跡調査会報告書 第34集

児玉大天白遺跡

－ 工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

平成22年10月22日 印刷

平成22年10月29日 発行

発行／ 本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1185

印刷／山進社印刷株式会社